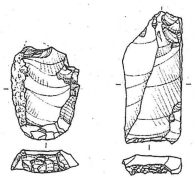
雲仙市文化財調査報告書（概報）　第２集

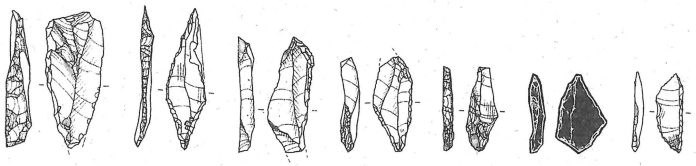
龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡

ryuou　shinshouji

（旧石器時代編）

－国見中部地区県営圃場整備事業に伴う発掘調査概報－





2007
長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

このたび平成16年度に実施しました国見中部地区圃場整備事業に伴う龍王遺跡・真正寺条里跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました．当市は平成17年10月11日（10（とお）に11日（いいひ））に７町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）が合併して誕生しました．「豊かな大地・輝く海とふれあう人々で築くたくましい郷土」の実現に向けて地域の発展を目指しています．

本報告は旧国見町において調査された成果であり，ここにその報告を行います．

龍王遺跡・真正寺条里跡は，島原半島の北端に位置する半島内でも随一の平坦面を誇る扇状地台地上にひろがります．古代条里制の残る水田地帯に位置し，長い間脈々と営まれた農耕地の下に埋蔵されていた古代人の息吹が，発掘調査によって目を覚ましたことになります．遺跡の南側には雲仙普賢岳がそびえ，頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています．北側に目を移せば，眼下は有明海が広がり，佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます．

これまでの調査において遺跡からは，旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が発見されておりその埋蔵量は計り知れないほどです．今概報では遺跡より検出された旧石器時代の遺物・遺構を報告いたします．二つの遺跡からは６箇所に分かれてそれぞれにまとまりのある旧石器時代文化層が検出されています．重層関係にある資料は残念ながら検出されていませんが，地点ごとに異なる分布状況や石器組成をみせており，いずれの地区にも時期差があると考えられます．総出土点数も1,000点を超え，剥片剥離技術の復元も可能な資料が含まれており，県内でもきわめて稀な資料であります．はるか昔に当地で暮す祖先たちの生活が垣間見えます．今報告では火山灰分析により，指標火山灰である「姶良（あいら）Tn火山灰」も検出されており，より緻密な石器群の変遷を捉えることができたと考えております．

雲仙市の緑豊かな農業地帯も，近年の農業基盤整備に伴い大きく変貌しております．このような情勢の中で，祖先の貴重な文化遺産を保護し，これを後世に伝えることは，私たちに課せられた重要な責務であります．本市（旧７町）では，このような事態に対処するため，遺跡発掘調査を行い保存・保護に努めてまいりました．調査の成果を公開する一つの手立てとして報告書を作成いたしましたが，遺跡の宝庫といわれる本市にとりましては，貴重な歴史と文化を理解するうえで大きな役割を果たすものと期待しております．

最後になりましたが，今回の調査に当たり，地元地権者の皆様，工事関係者の皆様，大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課の皆様のご指導に衷心より感謝申し上げ，発刊のことばといたします．

平成19年３月31日

長崎県雲仙市教育委員会
教育長　鈴　山　勝　利

例　　言

1．本報告は平成16年度（2004年～2005年）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する龍王遺跡・真正寺条里跡の緊急発掘調査の報告（概報）である．

2．調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した．
発掘調査は下記の期間実施した．
2004年８月３日～2005年３月13日　龍王遺跡１区～15区・拡張区・倉地川地区，
真正寺条里跡１区・２区

3．調査体制は次のとおりである．

調査主体　国見町教育委員会	教　育　長	原　宮之
	教育次長	吉田　正昭
	社会教育係長	柴﨑　孝光
調査担当	社会教育係	辻田　直人
	文化財調査員	竹中　哲朗
現体制　雲仙市教育委員会	教　育　長	鈴山　勝利
	教育次長	辻　政実
	生涯学習課長	岩永　判二
	文化財班班長	柴﨑　孝光
	主　査	江﨑　亮太
	主　査	辻田　直人
	文化財調査員	山下　美郷・小野　綾夏・益田　豊明

4．現地での遺構・遺物の実測は東　文子・林　繁美・寺中典子・徳永美也子・深水聡子・福田次郎・益田豊明（当時別府大学）・竹田将仁・竹中・辻田が行い，遺物の実測は早稲田一美・濱本秀美・辻田が，トレースは早稲田一美が行った．また，図版の編集・作成は早稲田一美・小野綾夏・辻田が行い，写真は現地調査を竹田将仁・竹中・辻田が，遺物写真は早稲田一美・柳原亜矢子・小野綾夏・辻田が行った．裏表紙については生涯学習課生涯学習班 吉田奈央による．

5．遺構・遺物実測の一部は㈱埋蔵文化財サポートシステムに委託した．

6．火山灰分析・年代測定・植物珪酸体分析は㈱古環境研究所に委託した．

7．空中写真撮影業務は㈱九州文化財研究所に委託した．

8．本書における遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している．

9．本書で用いた方位はすべて真北であり，国土座標は世界測地系による．

10．現地調査および本書の刊行にあたって多くの方々からご助言いただいた，記して謝意を表します．
小畑弘己（熊本大学），長岡信治（長崎大学教育学部），早田　勉（㈱古環境研究所），萩原博文（平戸市教育委員会），川道　寛（長崎県文化施設整備室），中村真理（東京大学），阿部　敬（東京大学），木﨑康弘（熊本県立装飾古墳館），池田朋生（熊本県立装飾古墳館），岩谷史記（熊本市教育委員会），渡邊康行（㈱埋蔵文化財サポートシステム），山口勝也（㈱埋蔵文化財サポートシステム），荒木伸也（長崎県南島原市教育委員会），宇土靖之（長崎県島原市教育委員会），九州旧石器文化研究会，福岡旧石器文化研究会，長崎県教育委員会，㈱野田建設，㈱星野建設，㈱有明建設，㈲織田建設（順不同）

11．本書の執筆・編集は辻田直人による．

目　　次

巻頭図版
発刊にあたって
例言
本文目次
挿図目次
表目次
図版目次

第１章　調査の経緯 …… １ｐ
　第１節　発掘調査にいたる経緯　　第２節　発掘調査の方法及び経過
　第３節　遺跡の地理的・地形的環境

第２章　基本土層 …… ４ｐ
　第１節　各調査地点の対比

第３章　旧石器時代 …… ７ｐ
　第１節　龍王遺跡４区石器群　　第２節　龍王遺跡倉地川地区石器群
　第３節　龍王遺跡５区・６区石器群　　第４節　龍王遺跡13区・14区石器群
　第５節　真正寺条里跡１区石器群　　第６節　真正寺条里跡２区石器群
　第７節　その他の石器

第４章　自然科学分析 …… 52ｐ
　第１節　火山灰分析　　第２節　年代測定
　第３節　植物珪酸体分析

第５章　総　　括 …… 71ｐ
　第１節　概要　　第２節　まとめ

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図(1/20,000)
第２図　調査区配置図(1/10,000)……2
第３図　龍王遺跡付近の地形断面(東西方向)…3
第４図　龍王遺跡・真正寺条里跡旧石器時代遺物出土地点土層対比(1/50)……4
第５図　龍王遺跡４区旧石器時代遺構・遺物検出状況(1/100)……6
第６図　龍王遺跡４区旧石器時代Pit群(1/50)…7
第７図　龍王遺跡４区出土石器(2/3)……8
第８図　龍王遺跡倉地川地区G-2東壁土層(1/50)…9
第９図　龍王遺跡倉地川地区グリッド設定図(1/400)…9
第10図　龍王遺跡倉地川地区旧石器時代遺物検出状況(1/400)……10
第11図　龍王遺跡倉地川地区出土石器(ナイフ)(2/3)…11
第12図　龍王遺跡倉地川地区出土石器(掻器)(2/3)…12
第13図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（剥片尖頭器）(2/3)……12
第14図　龍王遺跡倉地川地区出土石器(縦長剥片)(2/3)…13
第15図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（打面再生剥片）(2/3)……14
第16図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（石核調整剥片）(2/3)……15
第17図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（石核調整剥片・残核）(2/3)……16
第18図　龍王遺跡倉地川地区出土石器(2/3)…17
第19図　龍王遺跡５区・６区旧石器時代遺構・遺物検出状況(1/100)……18
第20図　龍王遺跡５区 SK-1(1/50)……19
第21図　龍王遺跡５区・６区旧石器時代遺物分布状況(1/100)……20
第22図　龍王遺跡５区・６区出土石器(ナイフ)(2/3)…21
第23図　龍王遺跡５区・６区出土石器（使用痕のある剥片）(2/3)……22
第24図　龍王遺跡５区・６区出土石器（加工痕のある石器・接合資料）(2/3)……22
第25図　龍王遺跡５区・６区出土石器（打面再生剥片）(2/3)……23
第26図　龍王遺跡５区・６区出土石器(石核)(2/3)…23
第27図　龍王遺跡５区・６区出土石器(縦長剥片)(2/3)…24
第28図　龍王遺跡５区・６区出土石器(剥片)(2/3)…25
第29図　龍王遺跡13区・14区旧石器時代遺物検出状況(1/100)……26
第30図　龍王遺跡13区・14区旧石器時代遺物分布状況(1/100)……27
第31図　龍王遺跡13区・14区大型剥片石器検出状況(1/20)……28
第32図　龍王遺跡13区・14区出土石器（ナイフ他）(2/3)……28
第33図　龍王遺跡13区・14区出土石器（打面再生剥片）(2/3)……29
第34図　龍王遺跡13区・14区出土石器（スクレイパー）(2/3)……29
第35図　龍王遺跡13区・14区出土石器（剥片・接合資料）(2/3)……30
第36図　龍王遺跡13区・14区出土石器（剥片・接合資料）(2/3)……31
第37図　真正寺条里跡１区旧石器時代遺物検出状況(1/200)……32
第38図　真正寺条里跡１区旧石器時代遺物分布状況(1/200)……33
第39図　真正寺条里跡１区出土石器(尖頭器)(2/3)…34
第40図　真正寺条里跡１区出土石器(素材剥片)(2/3)…35
第41図　真正寺条里跡１区出土石器(台形)(2/3)…36
第42図　真正寺条里跡１区出土石器(削器・掻器)(2/3)…36
第43図　真正寺条里跡１区出土石器(縦長剥片)(2/3)…37
第44図　真正寺条里跡１区出土石器(残核他)(2/3)…37
第45図　真正寺条里跡２区旧石器時代遺物検出状況(1/200)……38
第46図　真正寺条里跡２区旧石器時代遺物分布状況(1/200)……39
第47図　真正寺条里跡２区出土石器(剥片尖頭器)(2/3)…40
第48図　真正寺条里跡２区出土石器（台形・削器・掻器）(2/3)……41
第49図　真正寺条里跡２区出土石器(縦長剥片)(2/3)…42
第50図　真正寺条里跡２区出土石器(剥片他)(2/3)…43
第51図　真正寺条里跡２区出土石器(残核)(2/3)…44
第52図　その他の石器（細石核）(2/3)……45
第53図　その他の石器(エンドスクレイパー)(2/3)…45
第54図　雲仙市十園遺跡32区・33区の Pit と石器群…71
第55図　龍王遺跡５区・６区石材別の出土石器…73
第56図　29頁第34図112摩滅範囲（アミ）……74
第57図　真正寺条里跡１区石材別の出土石器…74
第58図　真正寺条里跡１区石材別分布状況…75
第59図　雲仙市国見町十園遺跡出土石器（1/3）…77
第60図　龍王遺跡・真正寺条里跡の石器群の変遷（1/3）…80

表　目　次

第１表　龍王遺跡４区旧石器時代遺物計測表……46
第２表　龍王遺跡倉地川地区旧石器時代遺物計測表……46
第３表　龍王遺跡５区・６区旧石器時代遺物計測表……48
第４表　龍王遺跡13区・14区旧石器時代遺物計測表……49
第５表　真正寺条里跡１区旧石器時代遺物計測表……50
第６表　真正寺条里跡２区旧石器時代遺物計測表……51
第７表　その他の石器計測表……51
第８表　器種別の石器出土数……77

図　版　目　次

中表紙図版　遺跡上空より有明海をのぞむ（右上建物は雲仙市立国見中学校）
巻頭図版①　龍王遺跡４区出土石器　倉地川地区出土石器　龍王遺跡５区・６区出土石器
巻頭図版②　龍王遺跡13区・14区出土石器　真正寺条里跡１区出土石器　真正寺条里跡２区出土石器

図版１
遺跡上空写真（昭和35年度国土地理院）

図版２
龍王４区土層堆積状況
龍王４区柱穴検出状況
龍王４区柱穴半裁状況
龍王４区柱穴完掘状況
龍王４区完掘状況
龍王４区石器検出部分（人）と柱穴の位置（竹）
倉地川地区調査風景
倉地川地区G-2グリッド石器検出状況

図版３
倉地川地区G-2グリッド東壁土層堆積状況
倉地川地区調査風景(発掘体験による石器の発見！)
龍王５区・６区石器検出状況
龍王５区・６区SK-1検出状況
龍王５区・６区SK-1半裁状況
龍王13区・14区調査風景
龍王13区・14区土層堆積状況
龍王13区・14区石器検出状況（古墳住居柱穴壁面：第34図）

図版４
龍王13区・14区石器検出状況(プリント痕：第36図)
真正寺１区調査風景（中央は試掘坑）
真正寺１区完掘状況
真正寺２区完掘状況
真正寺２区石器検出状況（第47図160）
真正寺２区石器検出状況（第49図178）
真正寺２区土層堆積状況
真正寺２区科学分析用土層サンプリング風景

図版５
龍王４区，倉地川地区出土石器（2/3）

図版６
倉地川地区出土石器（2/3）

図版７
倉地川地区，龍王５区・６区出土石器（2/3）

図版８
龍王５区・６区,龍王13区・14区出土石器(2/3)

図版９
龍王13区・14区，真正寺１区出土石器（2/3）

図版10
真正寺１区，真正寺２区出土石器（2/3）

図版11
真正寺２区，その他出土石器（2/3）

第１図　遺跡位置図(1/20,000)

第１章　調査の経緯

第１節　発掘調査にいたる経緯

平成８年度に長崎県島原振興局より，国見中部地区県営圃場整備事業の計画があるとの紹介を受け，国見町教育委員会が主体となり平成10年度に事業予定地内の遺跡範囲確認調査を実施した．その結果，龍王遺跡・樋ノ口遺跡・真正寺条里跡の３遺跡が新たに発見された．島原振興局・国見町産業振興課・土黒地区土地改良区・国見町教育委員会による協議の結果，設計変更により遺跡の大部分は盛土により保存を行うこととなったが，遺跡の消滅する部分について全面発掘調査を実施することとなった．本調査は平成16年度～平成18年度の３ヵ年にわたって実施する計画とし，今概報では平成16年度の調査内容についてその一部を報告する．今回報告する調査は，龍王遺跡・真正寺条里跡に係るもので，排水路建設及び圃場造成のために遺跡の消滅する部分について，長崎県島原振興局より委託を受けて行ったものである．

第２節　発掘調査の方法及び経過（第１・２図）

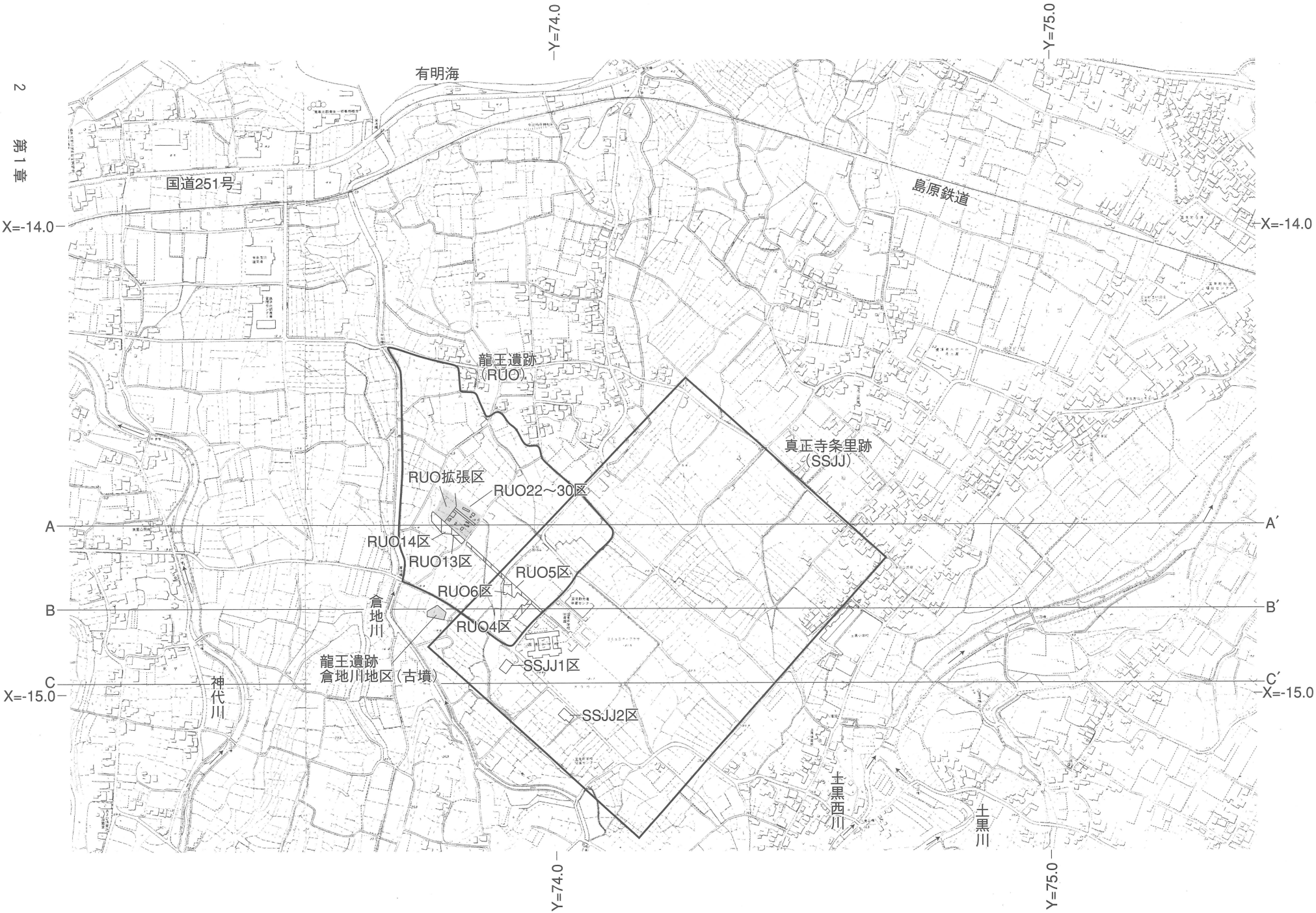
本調査は世界測地系を使用し，調査対象範囲（排水路建設及び圃場造成のために遺跡の消滅する範囲）を20mメッシュに区切り，龍王遺跡１区～15区，真正寺条里跡１区・２区を設定し順次調査を実施した．しかしながら，調査区の立地条件などにより，必ずしも20mメッシュの調査区とはなっていない．また，本来の調査予定地以外の範囲についても，工事により遺跡の破壊される恐れのある部分については，長崎県島原振興局・国見町産業振興課・土黒地区土地改良区・長崎県学芸文化課・国見町教育委員会による協議に基づいて遺構確認（一部完掘）等を行っている（第２図濃いアミ掛け部分：龍王遺跡拡張区，22区～30区，倉地川地区）．

龍王遺跡・真正寺条里跡は概ね水田として利用されており，条里制の痕跡も見られることから，これまでに数度の造成工事が実施されていると考えられる．したがって，表土を除去すると遺物包含層がまったく存在せず，基盤層に掘り込まれた遺構確認面が露出する部分も少なくない．調査では重機により表土を除去した後，遺構確認面または遺物包含層上面まで再度重機により掘削を行っている．その後の掘削作業は概ね人力によるが，旧石器時代の遺物が検出された龍王遺跡13区・14区は一部再度重機による掘削を実施している．

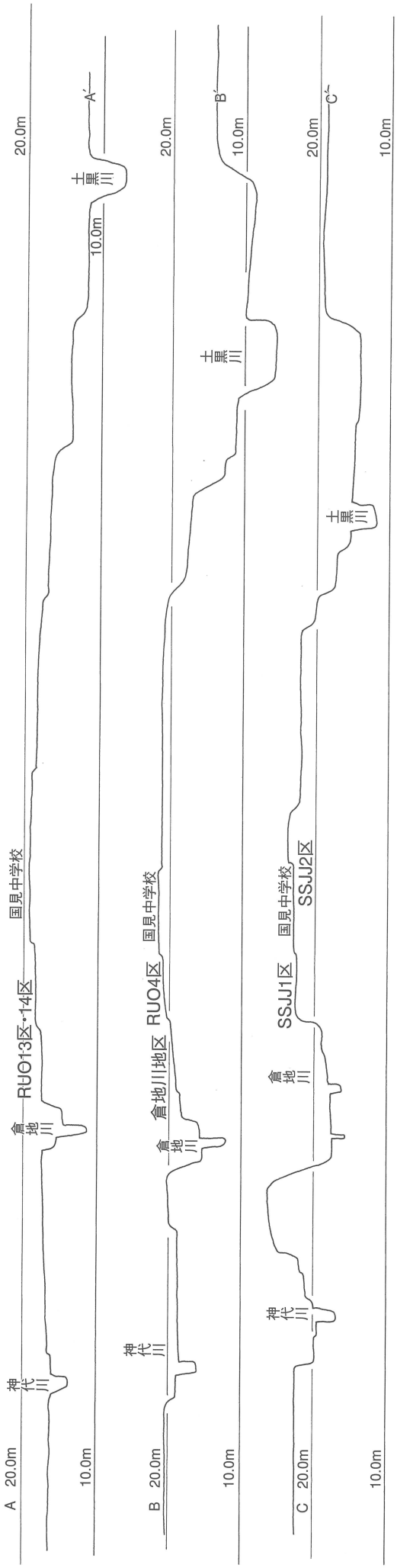
遺物については，包含層遺物は一括で取上げ，住居跡など遺構に関わるものについては可能な限り実測し取上げた．また，旧石器時代の遺物については調査期間の都合で一部（倉地川地区）グリッド・層位一括で取上げたが，基本的には全てドットマップを作成している．以下調査の概要を述べる．

龍王遺跡からは旧石器時代～古墳時代までの多種・多様な遺構・遺物が検出されている．旧石器時代については今概報で述べるため説明を省くが，各時代の特徴的な事柄を述べる．龍王遺跡３区・４区からは縄文時代と考えられるおとし穴状遺構が検出されている．検出の深さや，底部形態に差異があるものが見られ，時期差があると考えられるが，はっきりとした時期は不明である．しかしながら，龍王遺跡内では倉地川地区より大量の押型文土器が検出されており，早期のおとし穴状遺構の可能性がある．龍王遺跡13区付近では古墳時代初頭の住居跡群や豪族居館と考えられる，１辺30mほどの方形の区画溝が検出されている．住居跡内や区画溝の中から二重口縁壺など古墳時代初頭の土器が大量に発見されており，古墳時代初頭の様相を知る上で貴重な資料となろう．倉地川地区では方形周溝墓や前方後円墳が検出されている．方形周溝墓の主体部は残存せず，周溝からの遺物も少ないため時期の特定が難しいが，前方後円墳からは多量の６世紀後半の土師器・須恵器が検出されており，前方後円墳造営の最末期のものと考えられる．方形周溝墓・前方後円墳については，刊行済の雲仙市文化財調査報告書（概報）第１集「龍王遺跡（倉地川古墳）」を参照ねがいたい．

竹中哲朗　2005『龍王遺跡（倉地川古墳）』雲仙市文化財調査報告書（概報）第１集　長崎県雲仙市教育委員会



第2図　調査区配置図(1/10,000)



第３図　龍王遺跡付近の地形断面（東西方向）

第３節　遺跡の地理的・地形的環境
（第２・３図）

龍王遺跡・真正寺条里跡は島原半島の北部に広がる火山性山麓扇状地上に位置する．半島内でも最大規模の平野部で，古代条里の地割（真正寺条里跡）を良く残しており，現在もその大半が水田として利用されている．両遺跡の広がる台地は，東端は土黒（ひじくろ）西川，西端は神代（こうじろ）川によって侵食された雲仙山麓より伸びる細長い地形を呈し，断面形状は扁平な蒲鉾状をなす．土黒西川，神代川共に鳥甲（とりかぶと）山の北麓に谷頭をもち，ほぼ並走して有明海に向けて北流するが，標高15m付近で土黒西川は土黒川と合流し北東に向きを変え，神代川は大きく西側に蛇行する．遺跡の位置する平坦部は三角州状扇状地となっている．さらに，両川のほぼ中央に，有明海より南３kmほどに谷頭をもつ倉地川が北流し扇状地を東西に分断する．龍王遺跡・真正寺条里跡は倉地川と土黒川の間に位置し，龍王遺跡は倉地川に沿って遺跡が形成されている．遺跡位置図や遺跡周辺の断面図を見ると，今回報告する旧石器時代の遺物が検出された地点は，倉地川沿いの河岸上に位置している．断面図から，倉地川は小河川でもあるが，氾濫原がそれほど広くなく比較的安定した地域と考えられる．それに比べて，土黒川は川幅も大きく広い氾濫原をもっている．試掘調査や本調査の状況から，龍王遺跡内に比べて真正寺条里跡，特に東側半分では土層の堆積が薄い状況が見られた．水田造成時に削平された部分もあろうが，大部分は土層自体の発達が見られなかったと考えられる．真正寺条里の範囲は土黒川からの細かい支流が流れ込み，また，試掘時には弥生時代の河川跡も検出されている．古来より河川の影響を受けやすい地域であったと考えられる．その反面，龍王遺跡内は，水田造成時に削平された部分も多く見受けられるが，元々は土層堆積が顕著であったことが看取される．龍王遺跡・真正寺条里跡に残された石器群は，当時暮らした旧石器時代人が「場の利用」の空間として安定した環境を提供する倉地川東岸を選択した結果，であると考えられる．

【参考文献】

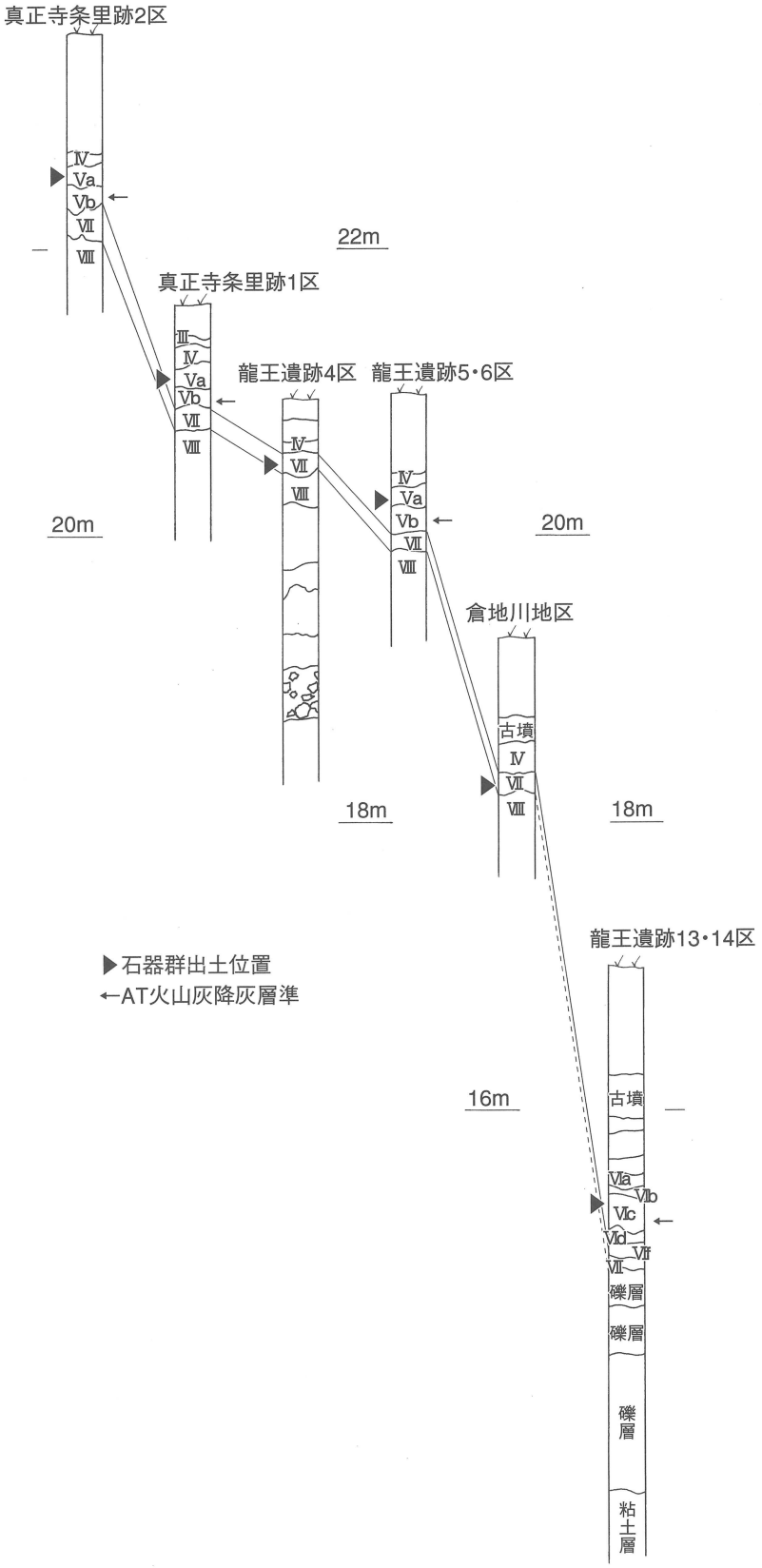
久原巻二　1994「第２章　地理的歴史的環境　Ⅰ地理的環境」『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書　第116集　長崎県教育委員会

第２章　基本土層

第１節　各調査地点の対比（第４図，図版２～４）

ー概要ー

龍王遺跡・真正寺条里跡の土層堆積は，立地が平坦な扇状地台地上のためか比較的良好な堆積状況を示している．ただし，遺跡内のほとんどは水田として利用されており，古代以降の造成工事によってその大部分が程度の差はあるが削平を受けている．水田耕作土を除去するとすぐに最下層である第Ⅷ層が検出されることも少なくない．今回の調査で旧石器時代の遺物の検出された調査区のうち，４箇所（龍王遺跡５区・６区，倉地川地区，真正寺条里跡１区，２区）は水田地帯の中に浮島のように残された畑地であった．これまでの水田整備のための造成を免れてきた部分である．この部分は旧石器時代のみならず古墳時代や縄文時代の包含層も残存しており，水田の造成工事がいかに遺跡に影響を及ぼすかが判る．残りの２箇所のうち，龍王遺跡４区は水田耕作土下の床土直下の土層に包含されており，同地区で検出された縄文時代のおとし穴状遺構の深度から察すると50cm～１mは削平を受けていると考えられ，辛うじて残存したものと考えられる．また，龍王遺跡13区・14区は地形的に窪んだ部分に当たり，地表面からは1.5m以上の深さをもって検出されている．古代以降の造成で「盛土」部分にあたったものである．このように見てみると，すでに削平されてしまった部分にも相当量の旧石器時代遺物が埋蔵されていたことが考えられる．事実，表面採取遺物の中には細石核やナイフ形石器，エンドスクレイパー等多くの遺物（45頁・第52図・第53図）が見つかっている．今回調査を行った部分以外は盛土により保存されることとなっており，今後まだまだ多くの同時代遺物・遺構の発見が期待される．



第４図　龍王遺跡・真正寺条里跡旧石器時代遺物出土地点土層対比(1/50)

ー各地点の説明ー

ここでは各旧石器時代遺物出土地点の基本的な土層について対比を行う．各地点の堆積状況は各地点石器群の説明時にも行うが，柱状図（第４図）で各地点の土層のつながりや上下関係を見てみたい．

前述したが，龍王遺跡・真正寺条里跡検出の旧石器時代遺物は，倉地川沿いの河岸上に見られる．蒲鉾状の台地の「縁（へり）」の部分である．ただし，龍王遺跡13区・14区については「縁」というよりもそこからさらに河川側に「降りた」地点と考えられる．龍王遺跡13区・14区南側の水田は倉地川までやや標高が低くなっており，調査において旧河川跡（弥生時代）が見つかっている．13区・14区付近の土層堆積もより河川に近い様相を示しており，龍王遺跡13区・14区は水場に近い地点と考えられる．それ以外の地点はほとんど同様の土層堆積を見せる．いずれの地点も共通する堆積は第Ⅶ層と第Ⅷ層である．第Ⅷ層は黄褐色の硬く締まった土層で，百花台遺跡群（松藤1994ほか）・十園遺跡（辻田・竹中2004）などの第Ⅷ層と共通する．その上位層である第Ⅶ層は黒褐色のきめの細かい土層でやや粘質である．百花台や十園の第Ⅶ層と共通する，いわゆる「暗色帯」である．この２つの土層は島原半島の基盤となる土層と考えられ，半島内の調査（土橋・渡邊2001，松藤1994ほか）においてはほぼ必ず検出される．第Ⅷ層からはK-TzやAso-4も検出（土橋・渡邊2001）されており後期旧石器時代以前の土層堆積である．第Ⅶ層より上位は地点によって土層の欠落があるが，上層から，第Ⅳ層は縄文早期の包含層，第Ｖａ層に旧石器時代の遺物包含層，第Ｖｂ層がATとなり第Ｖｂ層上部からも石器が検出される．13区・14区は前述のとおり若干土層堆積が異なるが，第Ⅳ層からK-Ah，第Ⅵｃ層下部からATが検出されている．百花台遺跡でのATは硬質の第Ⅵ層下部（第Ⅵｃ層：松藤1994）からの検出であるが，龍王遺跡・真正寺条里跡では，13区を除く他の地点では若干硬質の土層である第Ｖｂ層で検出されている．13区・14区は百花台遺跡群と同様に非常に硬質の第Ⅵｃ層からAT火山灰ブロックが見つかっており，地点によって土層発達の差異が認められる．また，倉地川地区ではAT層準相当層が欠落している．真正寺条里跡１区，２区の状況を見ると，真正寺条里跡２区は最も土層の堆積が明瞭であるが，倉地川地区に至るまでに第Ｖａ層・第Ｖｂ層が薄くなり無くなってしまうようだ．石器出土地点とAT火山灰層準を柱状図に示している．石器の重層関係は認められなかったが，各地点共にAT層準・第Ⅶ層・第Ⅷ層を軸に対比が可能と考えられる．真正寺条里跡１区，２区からは剥片尖頭器，角錐状石器の一群がAT（第Ｖｂ層）より上位で検出され，龍王遺跡13区・14区では大型の削器と小型のナイフ形石器が同じくATブロックを含む土層より上位で検出されている．これまでの調査成果や形式学的な成果と照らし合わせても，出土層位と遺物の内容に矛盾点はない．倉地川地区や龍王遺跡４区では第Ⅶ層よりナイフ形石器がまとまって検出されている．AT層準は検出されなかったが，下位の暗色帯出土の石器群である．石器の組成はナイフ形石器と掻器で，明瞭な縦長剥片剥離技術を基盤とした石器群である．形式学的にもAT下位の石器群と捉えることが出来るであろう．このように龍王遺跡・真正寺条里跡ではATを境にその前後の石器群の様相が見て取れる．

【参考文献】

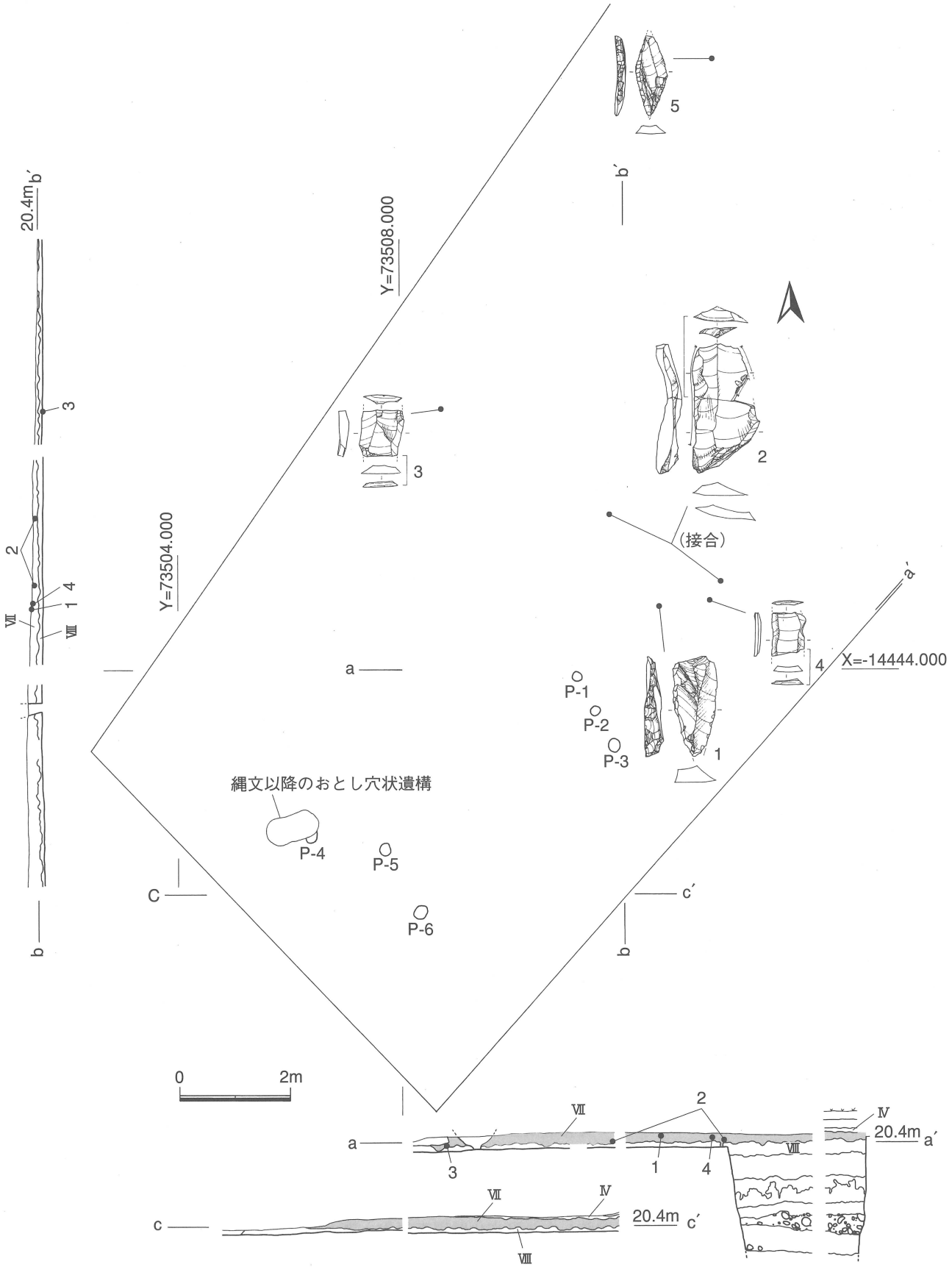
田川　肇・副島和明・伴耕一郎　1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書　第92集　長崎県教育委員会

田川　肇　1994『県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書　第116集　長崎県教育委員会

辻田直人・竹中哲朗　2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)　第４集　長崎県国見町教育委員会

土橋啓介・渡邊康行　2001『大崎鼻遺跡』布津町文化財調査報告　第１集　長崎県布津町教育委員会

松藤和人編　1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告　第８冊　同志社大学文学部分化学科



第５図　龍王遺跡４区旧石器時代遺構・遺物検出状況(1/100)

第３章　旧石器時代

第１節　龍王遺跡４区石器群

⑴　土層堆積状況（第５図，図版２）

４区は表土下に薄く黒色の古代遺物包含層があり，その下に旧石器時代の石器の包含されている第Ⅶ層が見られる．土層図から判るように調査区の全面に検出されるが，北側ほど上部が削平されている．ａ－ａ′の断面図から，第Ⅷ層以下に扇状地堆積層である砂層や礫層が確認される．石器は第Ⅷ層直上の暗色帯からの出土である．

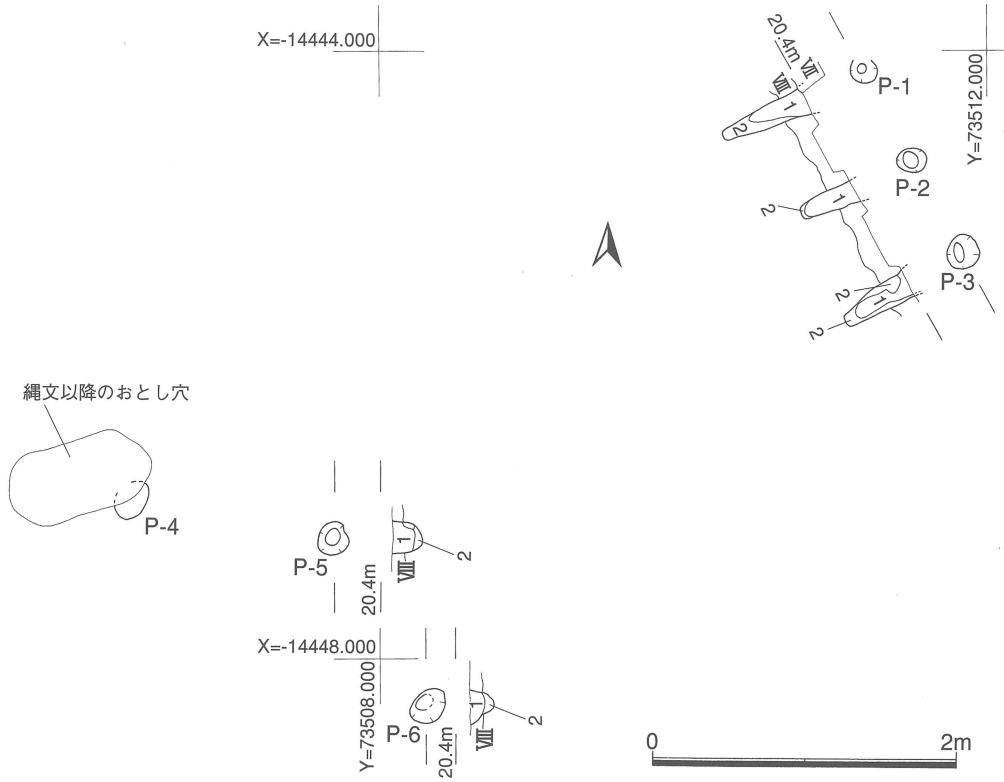
⑵　遺構　柱穴状遺構群（第６図，図版２）

石器群の検出された南側に計６ヶ所の柱穴状の遺構（P-1～P-6）が検出されている．第Ⅶ層除去後に検出されており，石器群に密接に関連する遺構と考えている．P-１はａ－ａ′のセクションベルトに一部がかかっており，断面観察を詳細に行ったが第Ⅶ層中に遺構の立ち上がりは確認できなかった．遺構内は２層に細分でき，１層は第Ⅶ層と酷似した黒色土．２層は黒色度と第Ⅷ層が混ざりあったようなやや硬く締まった土層である．土層堆積の状況から第Ⅶ層との明確な境目が確認されないため，第Ⅶ層発達以前に掘削埋没したものではなく，第Ⅶ層発達中に掘削・埋没した可能性が高く，石器群と同時期の遺構と考えられる．遺構は６箇所から検出されているが，実測図で判るように石器群に近い位置に等間隔に直線的に３ヶ所（P-1～P-3），やや離れて３ヶ所（P-4～P-6）検出されている．石器群に近いものはほぼ垂直に深く掘り込まれている．これに比べて離れて検出されているものはいずれも浅い掘り込みとなっている．しかしながら内部の土質・堆積状況はほぼ同じである．P-1～P-3及びP-5，P-6はほぼ平行に並び間隔も同様である．掘立柱建物とまでは言わないが，何か小規模な小屋的なものを連想することも可能と考えられる．

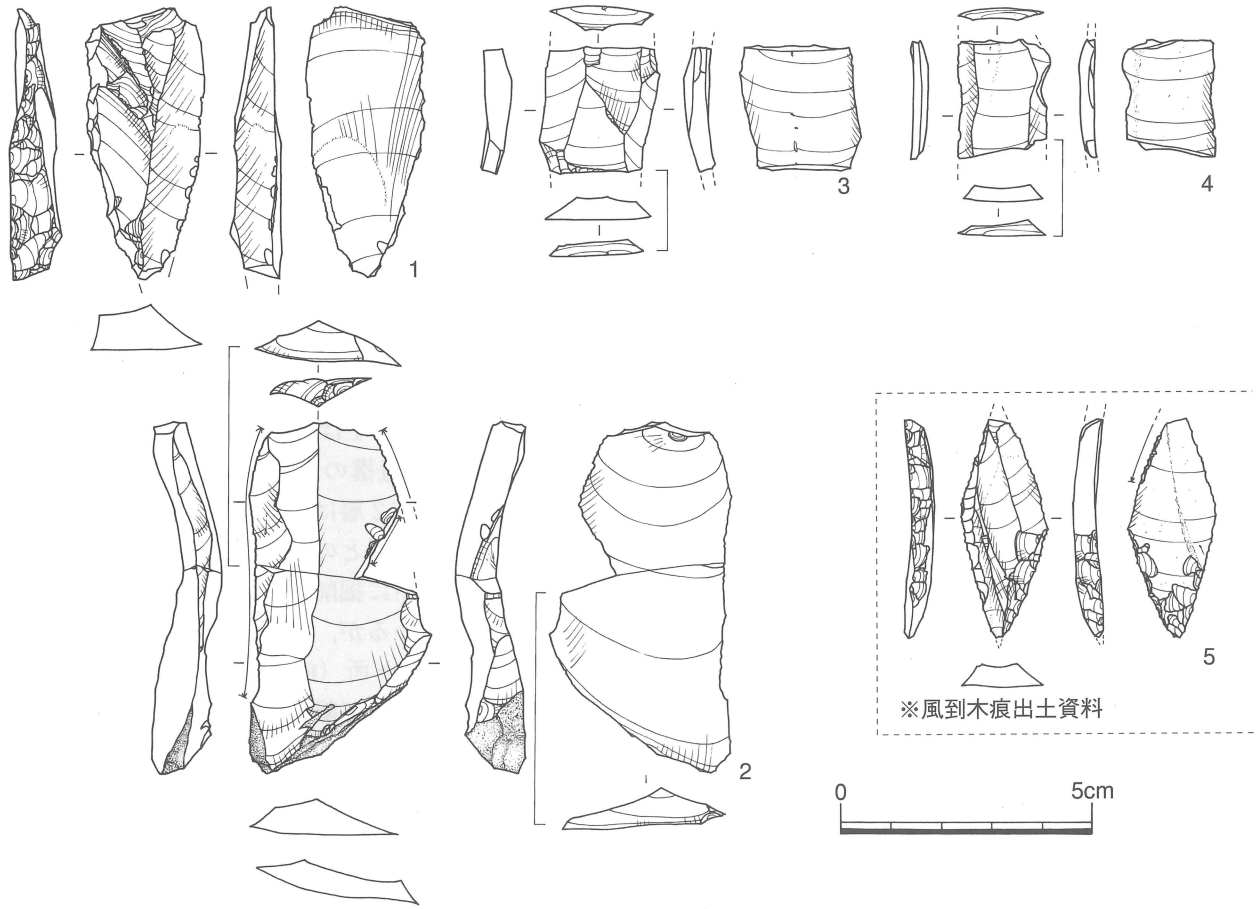
⑶　遺物（第５・７図，図版５）

ー分布状況ー

６点の黒色黒曜石製石器が検出されているが，接合資料もあり，実測図は５点となっている．**5**以外の石器は比較的近接しており，肉眼観察だが同石材と考えられる．**5**は風倒木跡出土の資料であり，石材的には他のものと若干違うが，剥片の大きさや剥片剥離技術は共通するものであり，同時代のものと考えて差し支えないものと考えられる．４区石器群の特徴として，チップや砕片類が見当たらず，この地での剥片剥離の痕跡が皆無であることが上げられよう．



第６図　龍王遺跡４区旧石器時代 Pit 群(1/50)



第７図　龍王遺跡４区出土石器(2/3)

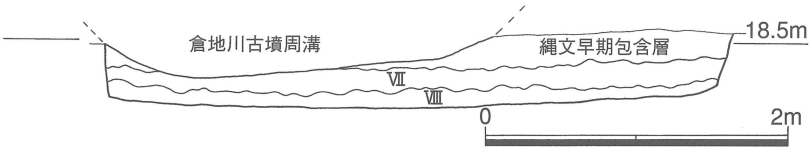
ー出土石器ー

石器は全て質の良い黒色黒曜石製である．１はナイフ形石器で厚みのある縦長状の剥片を素材とする．背面の観察から両極に打面を持つ石核から連続して剥離された剥片である．左側縁に粗いブランティング加工を施し，最下部の稜上には右側からの調整がみられ，基部側の厚さを減じるような格好となっている．右側縁は素材剥片のエッジ部分を刃部としている．上端は階段状剥離，下端は調査時の折れである．２は厚みのある縦長剥片を素材とする使用痕のある剥片である．背面の観察から打面を固定して連続して縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものである．また，先行する剥離面から本資料よりさらに長い縦長剥片を剥離していたことが判る．両側縁に使用によるものか微細な剥離が見られる．打面は細かく調整が施されており，いわゆる「面取り」されている．また，本資料は中央部で２つに分割されているが，折れ面に調整を加えた痕跡もみられ，「折れ」ではなく「折ら」れたものと考えられる．また，分割されたもののうち打面側の資料はさらに分割され，分割面の背面側には使用によるものか微細な剥離が見られる．網かけ部分の剥離面には無数の傷が入っており，本資料剥片剥離以前，背面左側２枚の剥離の前につけられたものと考えられる．３・４は縦長剥片の上部・下部が折り取られたものである．ほぼ同様の資料であるが，３の背面には上下方向の剥離がみられ，４は同一方向からのみである．使用痕などは見られず，４の右側縁の白抜きは発掘時の欠損である．５は風倒木跡出土のナイフ形石器で，ほかの４点と比べると石材に白色粒が入るが，部分的なものである．やや厚みのある縦長剥片を素材とし，打面は両極に設定されている．左側縁にブランティング加工を施すが下半部はあまり顕著でなく辺縁部にとどまる．右側縁は下半部に粗いブランティング加工を施し，上半部の素材剥片のエッジ部分を刃部としている．刃部には主要剥離面側に使用によるものか微細な剥離が見られる．主要剥離面側下半部には側縁調整後に平坦剥離が施されているがそれほど顕著なものではない．上端と下端は当時の折れである．

第２節　龍王遺跡倉地川地区石器群

(1)　土層堆積状況（第８図，図版２～３）

倉地川地区の調査区は畑地として利用されており比較的良好な土層堆積を示している．当地区では方形周溝墓及び前方後円墳が検出されており，石器出土層の検出に至るまでに多くの時間と労力を費やした．前方後円墳の盛土部分は耕作によりほとんど削平されており，調査前の状況では古墳があるとの認識は皆無であった．古墳・古代の包含層を除去すると遺構検出面の黄色土（縄文早期包含層）となる．第８図に示すとおり古墳周溝により石器包含層である第Ⅶ層まで掘削が及んでおり，古墳周溝内からも石器の出土が見られる．石器は前述の龍王遺跡４区と同様の第Ⅶ層からの出土である．土層図からもわかるが早期包含層と第Ⅶ層の間に本来見られるはずのAT層準と考えられる第Ⅵ層などが欠落している．

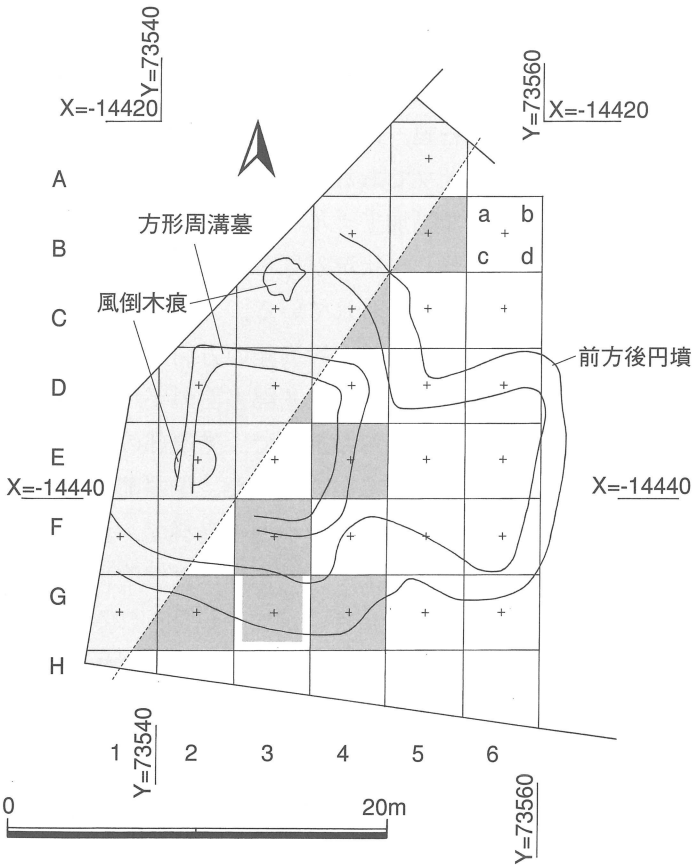


第８図　龍王遺跡倉地川地区 G-2東壁土層(1/50)

(2)　遺物（第９図，図版５～７）

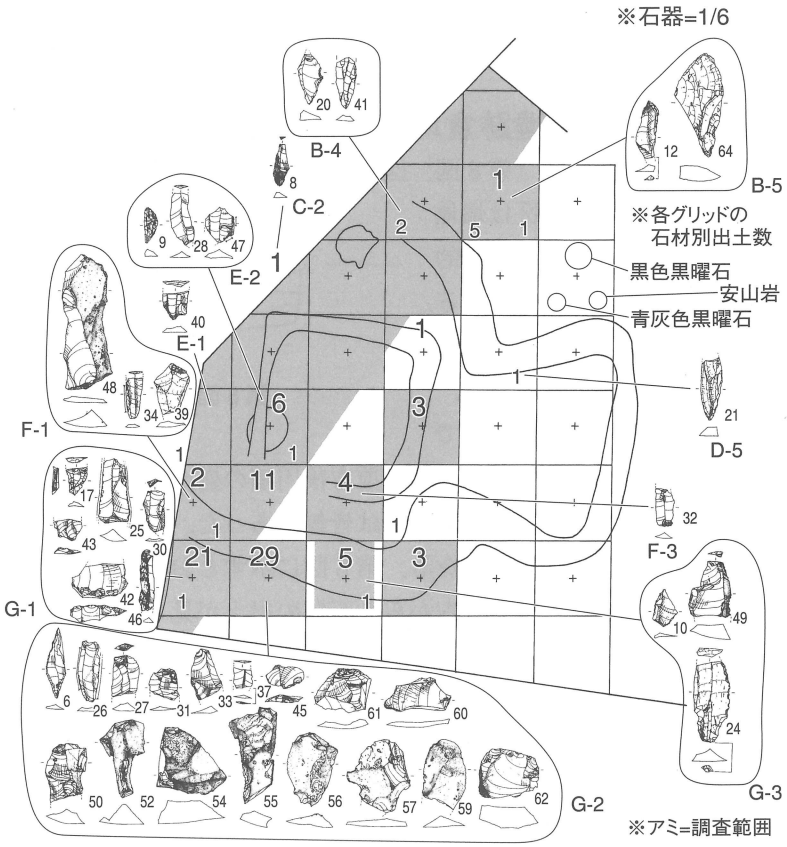
―分布状況―

前述したが，第Ⅶ層に調査が及ぶまでに相当の時間を費やしており，潤沢な調査期間が取れず，遺物のほとんどがグリッド毎の取上げとなっている．第Ⅶ層の調査に当てられた時間は４日間という短期間であり，通常の調査方法は採用できなかった．まず，すでに古墳周溝や風倒木跡などにより第Ⅶ層の残りが薄い部分（第９図点線より西側）については一気に掘り上げ遺物の有無の確認を行った．その後第Ⅶ層の残りの良い部分について４m四方のグリッドを設定し順次調査を行った．また，グリッド内はさらに２m四方に４分割している．その結果G-2グリッドから黒曜石剥片の集中的な分布を確認したため，G-2及びG-3についてはドットマップを作製している．グリッド取上げの石器や古墳周溝からの石器，また，それ以外の上層に包含された石器の状況から，G-2グリッドを中心とする石器の分布が想定される．第９図に示すとおり，調査区の全域に調査が及んでいるわけではなく，網かけのグリッドのみの調査で終了しており，かなり「粗い」調査である．当然取りこぼしや他時期の遺物の混入もあろうが，石器のほとんどが良質の黒色黒曜石製であり製作技法や風化面の観察などから，ほぼ同時期の資料と考えている．



第９図　龍王遺跡倉地川地区グリッド設定図(1/400)

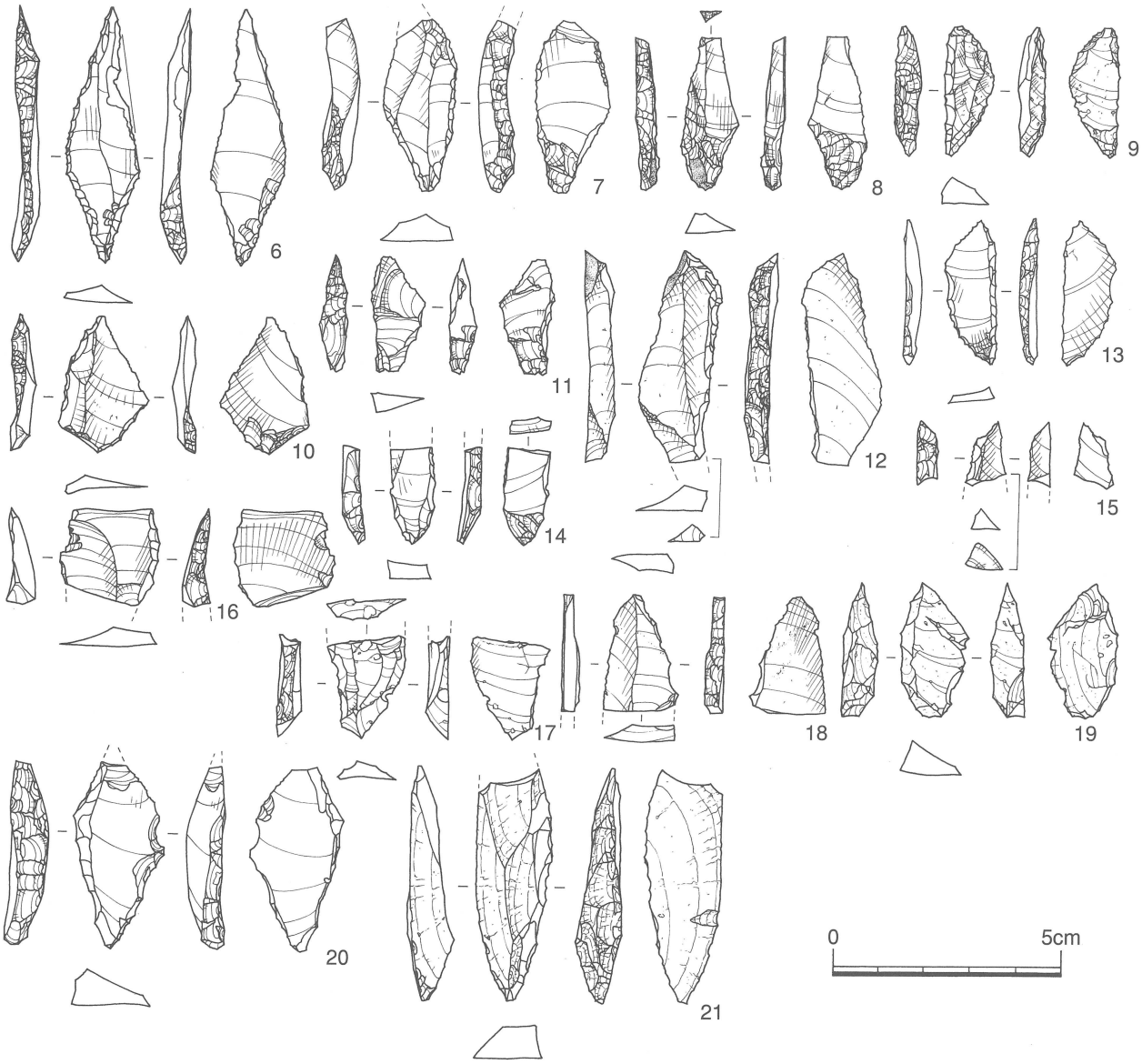
右第10図に各グリッドの石器出土総数を示す．G-2グリッドを中心に石器が検出されているのが判る．全ての石器が第Ⅶ層出土ではなく古墳の周溝などからの検出も各グリッドの石器数に含めている．出土した石器のほとんどが質の良い黒色黒曜石で占められ，青灰色黒曜石製や安山岩製の石器も出土するが出土地点が離れていたり，明らかに新しい時期の様相を示すものであり，龍王遺跡倉地川地区第Ⅶ層石器群はそのほとんどを黒色黒曜石製の石器で構成されるものと考えている．G-2グリッドからは主に礫面の残る大型の剥片が検出されており，石器製作の初期段階のものと考えられる．また，G-1グリッドでは打面再生剥片が検出されており，おそらく原石をほぼそのまま持ち込み，この地で一連の石器製作を行っていたものと想定できる．礫面の残る剥片から大きさを想定すると，少なくとも15cmを超える大きさの原石が持ち込まれていたものと考えられる．また，礫面や剥離面の観察で３種類ほどに分類できそうであるが，いずれも良質である．



第10図　龍王遺跡倉地川地区旧石器時代遺物検出状況(1/400)

ー出土石器ー

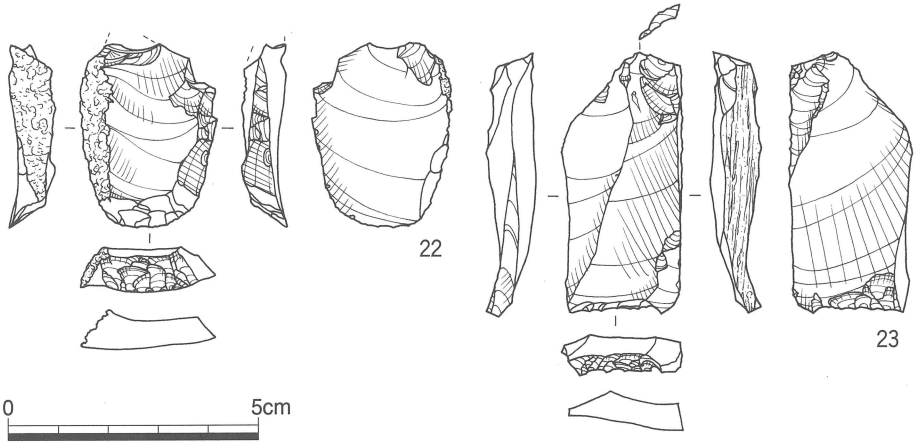
ナイフ形石器：6～18は黒色黒曜石製，**20**は青灰色黒曜石製，**19**，**21**は安山岩製である．ほとんどが縦長剥片を素材とする１側縁加工もしくは２側縁加工ナイフである．**6～11**，**14**には基部裏面に側縁調整後の平坦剥離が見られるのが特徴的である．**6**は２側縁加工ナイフで，最長の資料である．背面の剥離面から打面を入れ替えながら素材の縦長剥片を剥離した状況が見られる．丁寧なブランティングにより整形されており，先端部は背面からも細かい加工が行われている．刃部の白抜きは発掘時のガジリである．**7**は厚みのある資料で背面と主要剥離面では素材剥片剥離の方向が逆である．７と同様丁寧な加工が見られ，先端部の背面からの細かい加工も共通する．基部裏面の平坦剥離は顕著で，両側縁から施される．先端部は当時の折れである．**8**も同様に丁寧な加工で，先端部の背面側からの加工も行われている．基部裏面の加工は右側縁から丁寧に行われている．また，先端部は折れではなく，主要剥離面側から掻器状の加工が施されている．**9～11**，**13**はやや小型の資料で，素材は不定形の剥片で，先端部の角度が鈍角となる資料である．**9**は１側縁加工で，左側縁は直線的に仕上げられている．基部裏面には左側縁から平坦剥離が施され，先端部にも小さいが加工が見られる．**10**は薄い剥片が素材で，２側縁加工である．基部裏面には細かい平坦剥離が施される．背面の剥離面から，同様の不定形の剥片を剥離する石核から剥離されたものと考えられる．**11**は１側縁加工で，左側縁を直線的に仕上げている．右側縁は素材剥片のエッジ部分で加工は見られない．また，基部裏面の加工も顕著である．**12**は厚みのある縦長剥片素材の１側縁加工ナイフである．右側縁のブランティングは主要剥離面側から丁寧に行われているが，基部側は背面側から行われている．基部は当時の折れにより欠損するため加工の有無は不明である．また，先端部には一部礫面が残っている．もしくは，天地逆



第11図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（ナイフ）(2/3)

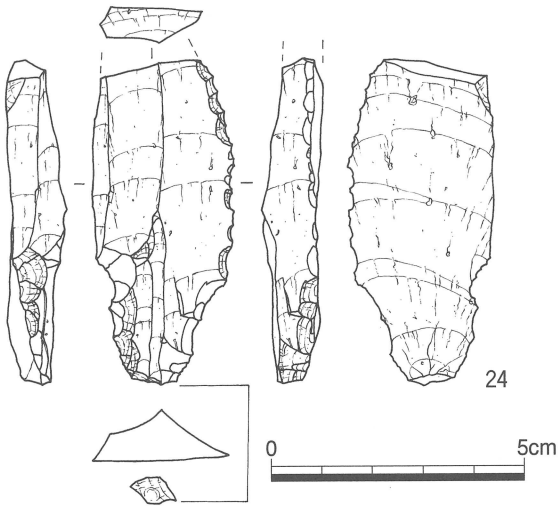
とすると，基部裏面の加工は見られないものの，先端部の背面側からの加工などは，６～８と共通する．**13**は薄い剥片素材の２側縁加工ナイフである．右側縁は主要剥離面，背面のいずれからも調整を施し直線的に仕上げている．基部裏面に加工は見られない．**14**は薄い剥片を素材とする．右側縁は主要剥離面側から，左側縁は背面側から調整が施されどちらも直線的に仕上げられている．先端部の形状は当時の折れにより不明だが９や13などの小型の石器と同様のものであろうか．基部裏面には左側縁より平坦剥離が施されている．**15**は先端部のみの資料であるが厚みのあるナイフ形石器と考えられる．丁寧なブランティングが施されている．**16**は厚みのある剥片を素材とする１側縁加工ナイフである．基部側は当時の折れにより形状は不明である．**17**はやや厚みのある剥片を素材とするナイフ形石器とした．上半部は当時の折れにより欠損する．左側縁のみに主要剥離面側から加工が見られるがやや荒い調整である．**18**は薄い縦長剥片素材のナイフ形石器である．下半部は当時の折れにより欠損する．左側縁には主要剥離面側から粗い調整が施される．**19**はガラス質の安山岩製の小型のナイフ形石器である．不定形の厚手の剥片が素材で，左側縁を背面側からの粗い調整で加工している．**20**は青灰色黒曜石の厚手の幅広い剥片を素材とするナイフ形石器である．B-5付近に青灰色黒曜石の集中地点があり他の黒色黒曜石石器群とは時期が異なる資料と考えられる．**21**は横長の剥片を素材とするナイフ形石器で，国府型ナイフ形石器と考えられる．時間的に新しい資料であろう．

掻器：**22**は厚手の剥片を素材とする．左側縁に礫面が大きく残っており，その形状から原石は円礫である．肉眼観察ではあるが星鹿半島産の質の良い黒色黒曜石と考えられる．石器の側面形状は主要剥離面側に湾曲する靴べら状を呈し，刃部形態は丸みを帯びる．刃部は主要剥離面から細かい調整により整形されており，刃部先端には使用によるものか微細な剥離がみられる．打面は素材剥片剥離時にハジケたのか欠損するが，それほど大きな範囲が欠損するわけではない．左側縁の主要剥離面側の白抜きは発掘時のガジリである．**23**は厚い縦長の剥片を素材とする．右側縁は大きく礫面を残しており，その形状から原石は角礫である．側面形状は主要剥離面側に湾曲する靴べら状を呈し，刃部は直線的である．刃部の整形は剥片の先端に主要剥離面からブランティング状の加工を施し，その後に主要剥離面側に平坦剥離を行っている．右側縁は本来素材剥片のエッジ部分と考えられるが，刃部整形時の平坦剥離によって大きく剥離している．刃部右端や刃部左端の剥離痕の状況から，元々は刃部両端が突き出たような形状であったと考えられる．打面は単剥離面打面である．２点とも明確な出土地点が不明であるが，石質・風化面などから先に紹介した黒色黒曜石製のナイフ形石器群に伴うものと考えられる．



第12図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（掻器）（2/3）

剥片尖頭器：**24**は安山岩製の厚みのある縦長剥片素材の剥片尖頭器である．打面を固定し連続して縦長剥片剥離を行う石核から剥離されている．基部側は主要剥離面側から粗い調整を両側縁に施し，すぼまるような形状を呈す．また，背面の基部側には打面部分からの剥離が見られ，基部側の厚みが薄くなっている．左側縁上半部には加工は見られないが，右側縁には主要剥離面側から細かい調整が施されており，やや鋸歯状を呈する．打面は単剥離面打面でパンチ痕が明瞭である．前述の黒色黒曜石石器群とは時期の異なる資料であろう．

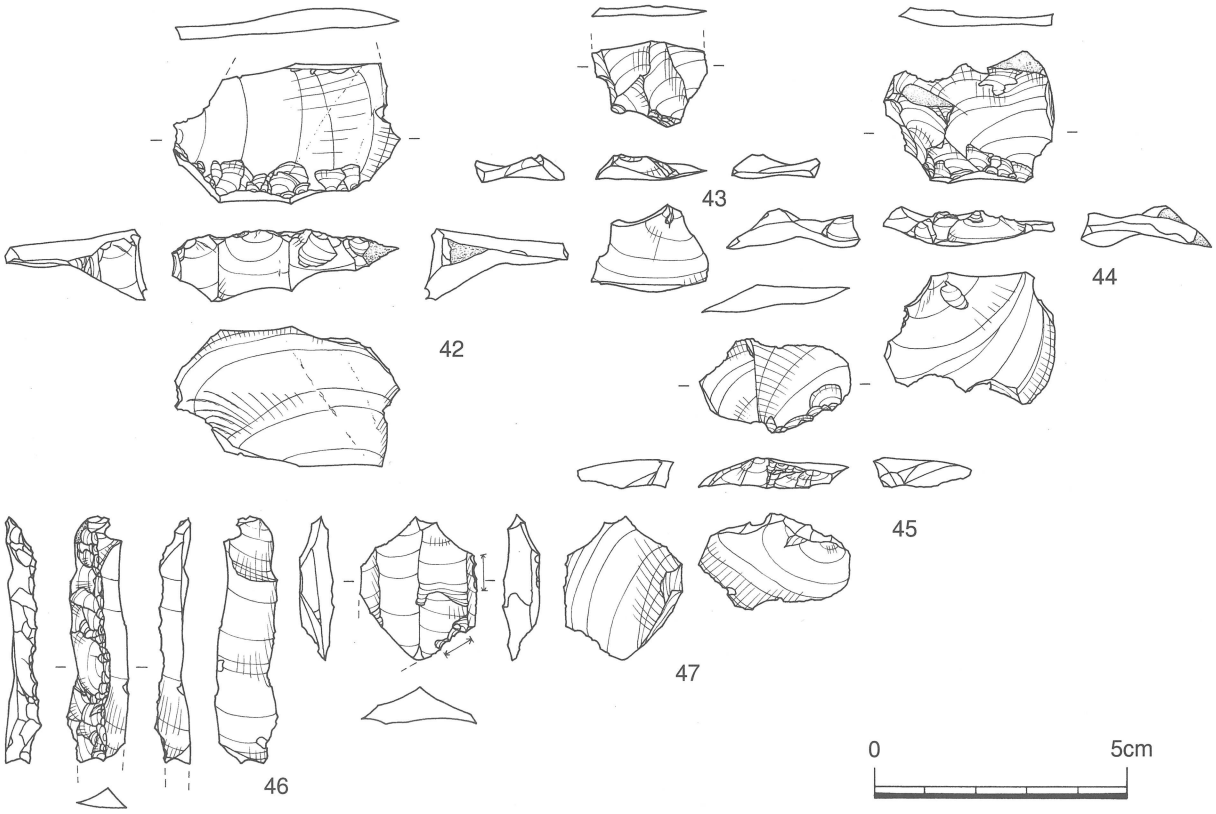


第13図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（剥片尖頭器）（2/3）

剥片：**25**～**41**は剥片で主に縦長剥片である．**39**は黒色の安山岩製，**40**・**41**は青灰色黒曜石製である．**39**は肉眼観察ではあるが長崎県佐世保市福井洞穴周辺を産地とする黒色の安山岩，いわゆる「北松浦玄武岩」に酷似している．同様の石材でさらに風化の進んだものも出土しており，後述する．**40**・**41**の青灰色黒曜石はB-5付近に集中して検出されており，黒色黒曜石石器群の検出されるG-2付近から離れており，時期差があると考えている．いずれも打面を固定した石核から剥離された剥片である．それ以外の**25**～**38**までは黒色黒曜石製で，石材的には数種類に分かれるがいずれも良質のもので，前述の黒色黒曜石製のナイフ形石器群や掻器に伴う資料と考えられる．また，第７図のナイフ形石器や以下に紹介する縦長剥片は，そのほとんどが石核の一端に打面を設定しているものであり，石材のみならず剥片剥離技術にも共通点が見られる．**27**・**30**には，後述する打面

第14図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（縦長剥片）（2/3）

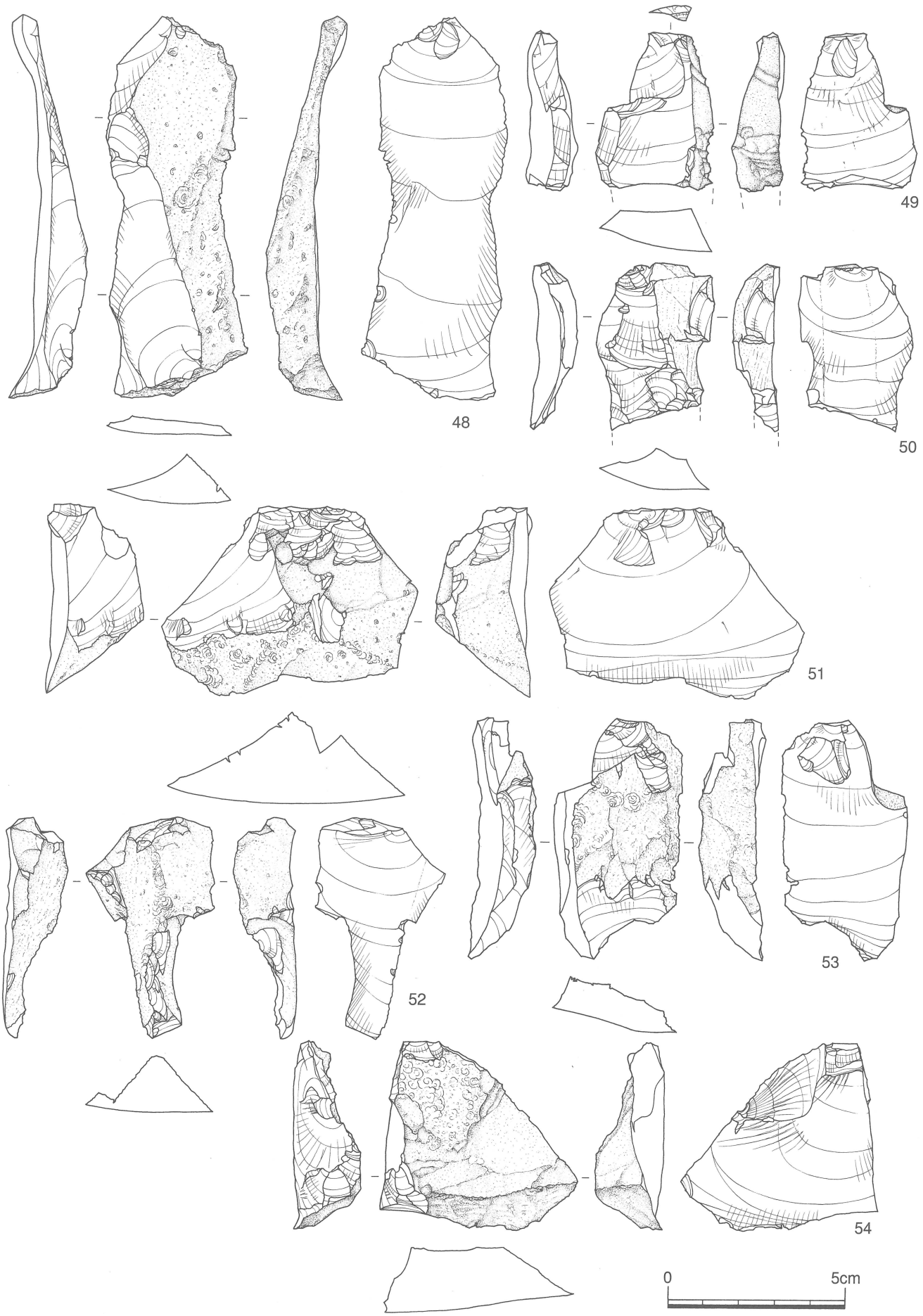
再生剥片との共通点も見られ，倉地川地区出土の黒色黒曜石石器群の一括性を示すものと考えられる．**25**は厚手の資料で先端部と打面部を当時の折れで欠損するが，両側縁には使用によるものか微細な剥離痕が見られる．**26**は薄く，打点部分は欠損する．両側縁の微細な剥離痕は使用によるものであろう．**27**は下半分を欠損する．打面には細かく面取りされた痕跡が見られる．**28**・**29**は打面部を当時の折れにより欠損する．**30**は打面が残っており，面取りされた形跡が見られる．**31**は先端部を，**32**は打面部を欠損するが，それほど大きな範囲ではない．**33**はやや幅の広い資料であり背面の剥離痕からも他の剥片よりは粗い剥離が伺える．また，打面調整も見当たらず，素材剥片剥離時のものではなく石核調整時のものか．**35**～**37**は打面部と先端部を欠損するもので．意識的に折り取られたものと考えられる．縦長剥片の中央部分と考えられるが，使用痕などは見当たらない．**34**・**38**は縦長剥片の先端部で，いずれの資料にも微細な剥離痕が見られ使用痕と考えられる．



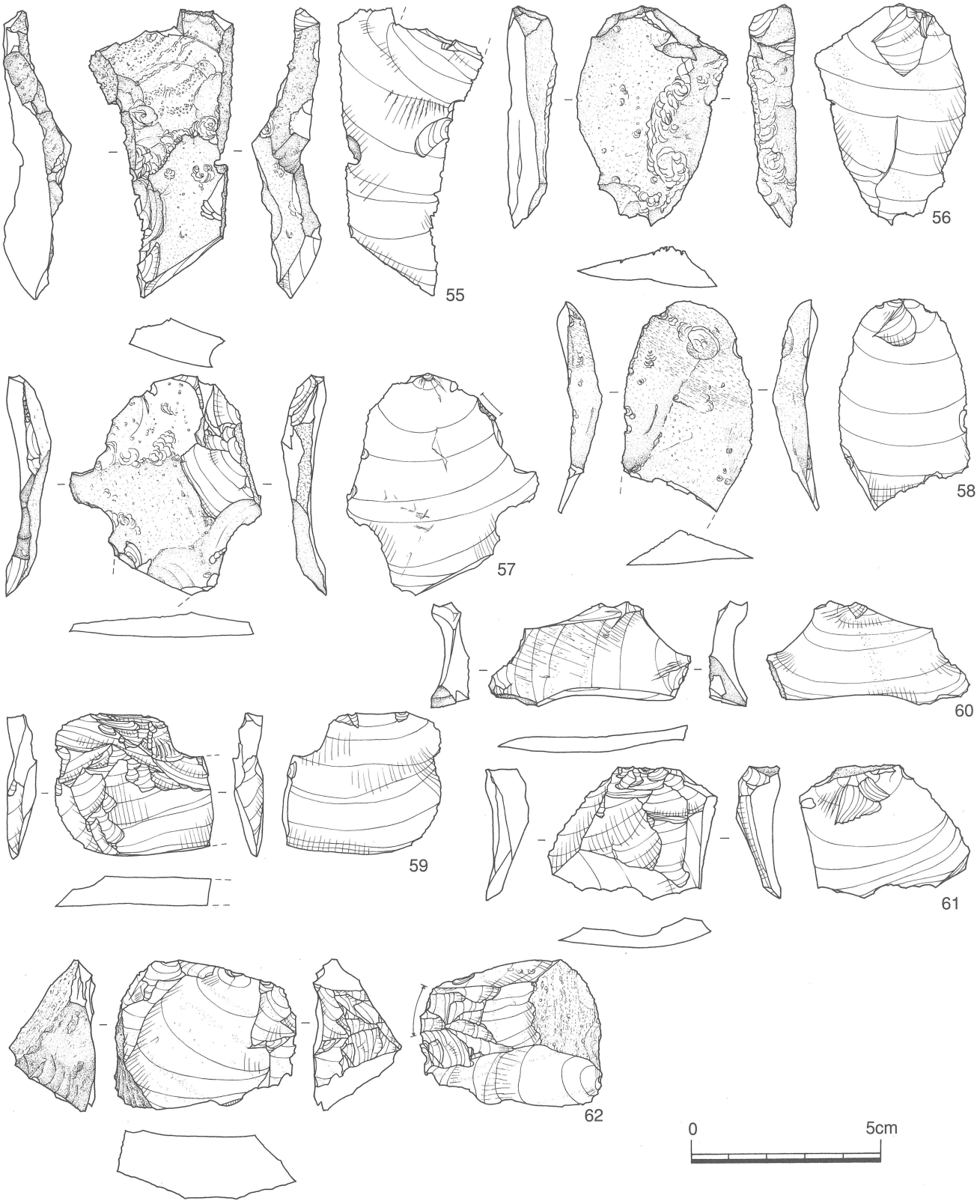
第15図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（打面再生剥片）（2/3）

打面再生剥片：42～47は黒色黒曜石の打面再生剥片や作業面再生剥片で，G-1グリッドから主に出土している．先述したナイフ形石器や縦長剥片を剥離した石核の一部と考えられる．石材や風化面などは共通する．接合資料こそないものの，この地での石器製作の痕跡を端的に示す資料であろう．**42～45**は縦長剥片を剥離する石核の打面再生剥片である．**42**は作業面の真反対側からの再生を行ったもので打面部分は欠損する．先行する打面再生は左側縁からの大きな一度の剥離で行われており，その後作業面側から細かい打面調整が顕著に行われている．第14図の**27**や**30**に見られる打面部分の調整と同様のものと考えられる．**43～45**は作業面側から再生を行ったもので数度に分けて打面の再生を行ったと考えられる．先行する打面再生も作業面側からの数度の剥離が見られ，同様に打面を再生した痕跡と考えられる．**44**は石核の打面側に礫面が残っており，縦長剥片剥離を行う初期のものと考えられる．これらのことから，石核の周囲から打面再生をくり返して剥片剥離を行っていた様子が伺える．**46**はクレステッドフレイクと考えられる．背面中央の稜上から左側に丁寧な調整が見られる．下端部は当時の折れにより欠損する．**47**は作業面再生剥片である．石核の左側面からの剥離を行っており．打面部は当時の折れで欠損する.右側縁や下縁には主要剥離面側からの微細な剥離が見られ.使用痕か.

石核調整剥片及び残核：48～58は背面に礫面を大きく残す剥片で，石核作成時の初期段階の剥片と考えられる．原石をそのまま持ち込んで剥片剥離を行っていたことは間違いないであろう．**48**は長さ10.8cmで，背面左上に残る剥離面はかなり上方に打点があると考えられ，原石は小さくとも１辺15cm以上の大きさでなければこのような剥片の剥離は無理であろう．礫面や風化面の観察から数種類の石材があると考えられる．角礫素材であるが腰岳によく見られる，白色の粒の入るものとは大きく違う．ただ，腰岳の現地見学に言った際，鈴桶遺跡に近い地点で今報告資料の礫面と酷似する良質の黒曜石を見ることが出来た．科学的な分析は行っておらず断定は出来ないが，腰岳中腹の質の良い原石を選択し利用している様子が伺える．当地からの直接的な採取であればかなりの労力を要している．



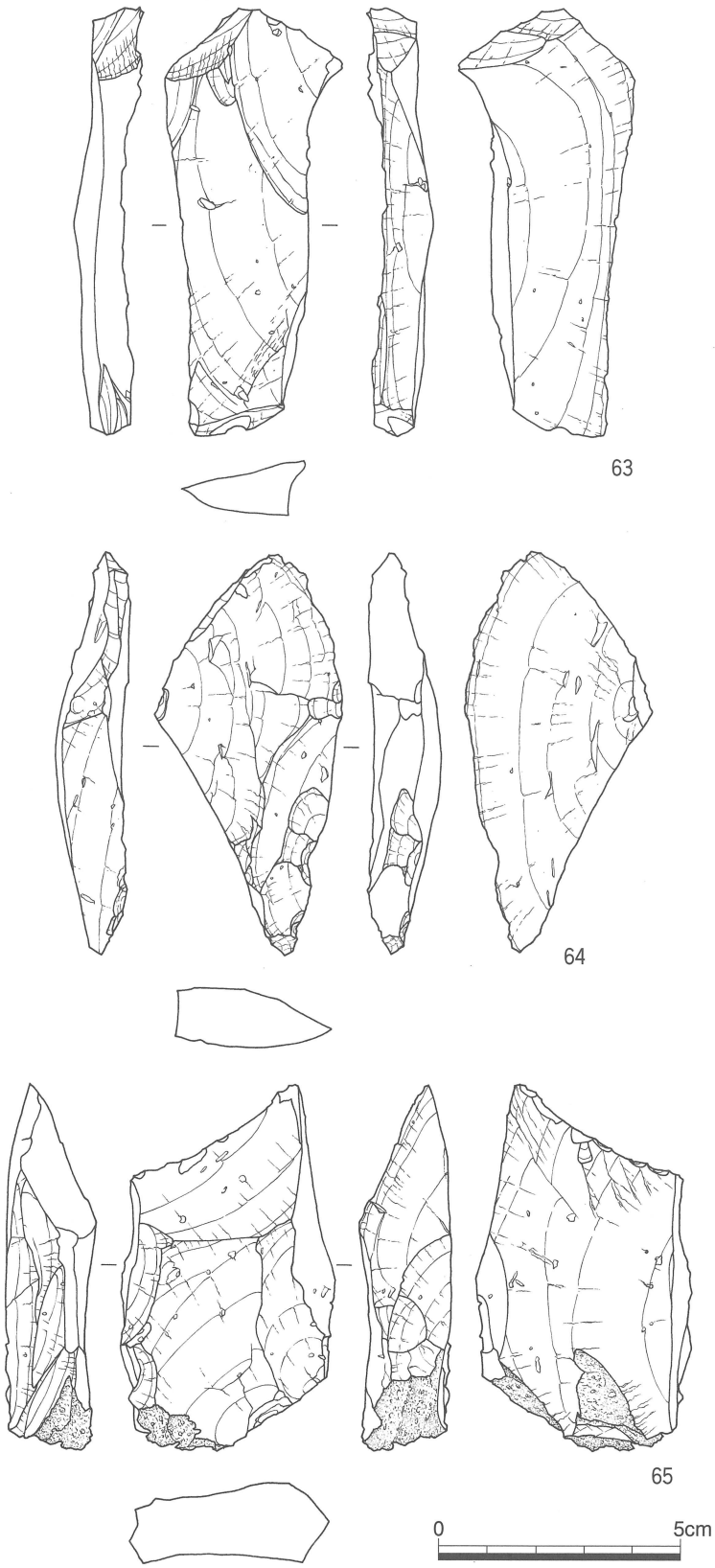
第16図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（石核調整剥片）（2/3）



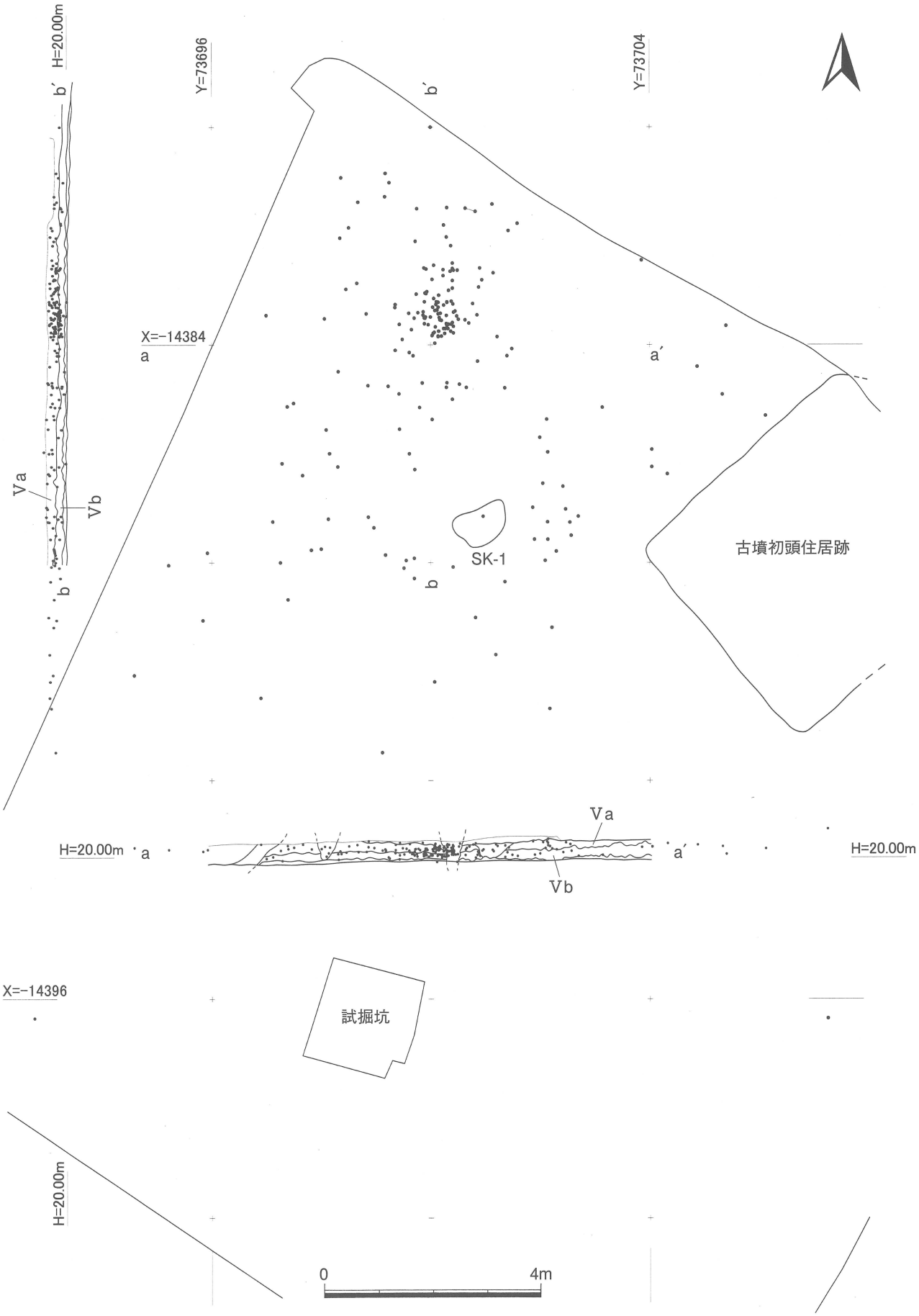
第17図　龍王遺跡倉地川地区出土石器（石核調整剥片・残核）（2/3）

59～**61**は礫面をもたず，また，剥片のサイズも小ぶりになり，石核調整のやや進んだ段階の剥片であろう．**62**は残核とした．角礫素材で，打面を転位しながら幅広の剥片を剥離していた様子がうかがえる．剥離面や礫面の状況から，少なくとも拳大ほどの原石が想定される．最終的には背面右斜め上方からの大きな剥片剥離の後，さらに右側縁上部から剥離を行い，背面側から浅い角度で掻器状の使用が行われたようだ．C面の左側から薄い剥離が見られ，右側縁の上半部には微細な剥離痕が見られる．

その他の石器：前述の黒色黒曜石石器群のほかに特筆すべき石器が検出されている．第18図の石器はいわゆる「北松浦玄武岩」製で，佐世保市福井洞穴出土（副島1993，川道2000）の石器群と質感や風化面の状況は酷似する．長崎県学芸文化課久原資料整理室において上記の石器と見比べさせて頂いたが，まったく同質のものである．肉眼観察である為断定はできないが，ほぼ間違いない．**63**は幅広の剥片で，打面部分は剥片剥離時に折れたのものか欠損する．背面の剥離面から，同様の幅広の剥片を剥離していた様子が伺える．上・下端は先行する剥離面であり，石核調整時のものか．下端の白抜きは発掘時のガジリである．**64**は加工痕のある剥片で，幅広の剥片を素材とする．下端の先鋭な部分に数箇所の剥離が見られる．また，左側縁上半部にはファシットも見られる．背面の剥離面から，同様の剥片を剥離する石核が予想される．**65**は使用痕のある剥片で，厚い素材である．両側縁は「折れ」か「折断」か判然としないが打面部分と剥片の先端部分が欠損する．背面には下方の礫面から２度の剥離が行われ剥片の厚さを減じる格好となっている．形態的にはクリーヴァー状と言える．上縁は発掘時のガジリも多く見られるが刃こぼれ状の細かい剥離が見られ，使用痕と考えられる．**63**はB-2からの出土であるが層位がわからない．発掘した作業員さんは第Ⅷ層黄色土からの出土と言うが，取上げた後であり確認はできなかった．残り２点は古墳周溝等からの出土である．剥離技術や石材・風化面から前述のナイフ形石器群に先行するものと考えられる．**63**や**64**の幅広の剥片から想定される石核は，福井洞穴出土資料（副島1993，川道2000）を髣髴とさせる．点数は少ないが，後期旧石器時代初頭の石器群と考えてよいであろう．



第18図　龍王遺跡倉地川地区出土石器(2/3)



第19図　龍王遺跡５区・６区旧石器時代遺構・遺物検出状況(1/100)

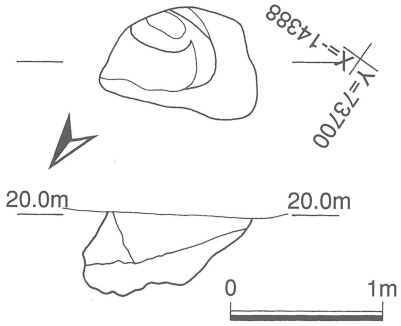
第３節　龍王遺跡５区・６区石器群

⑴　土層堆積状況（第19図，図版３）

５区・６区は周囲の水田より１ｍほど標高の高い，ほぼ方形に区画された畑地である．前節で紹介した４区石器群から50ｍ程の距離である．地元の古老の話によれば「あそこは寺ん（が）あった」とのことであったが，調査ではそれらしき痕跡は検出できなかった．表土から深さ50㎝程は中世以降の造成工事による客土と考えられ，重機により除去し調査を行っている．第19図の土層図に示すととおり，基本土層に見られる第Ⅳ層～第Ⅷ層（実測図では第Ⅶ層まで）までが連続して見られる．第Ｖｂ層がAT層準であり，石器は第Ｖａ層から第Ｖｂ層上層にかけて検出される．龍王遺跡４区に近接しており，土層堆積状況も酷似する．本来であれば周囲の水田地帯にも石器出土相当層（４区第Ⅶ層，５区・６区第Ｖａ層）が広がっていたと考えられる．

⑵　遺構　土坑（第20図，図版３）

第Ｖｂ層掘削中に土坑を１基検出している．完全な検出は第Ⅶ層上面で行った．第Ｖａ層掘削時には検出できておらず，石器群に伴う遺構と考えられる．長軸１ｍ，短軸0.7ｍの不定形土坑で，斜めに掘り込まれ内部にはゆるく段差が見られる．最上部付近で黒曜石片１点の検出を見たが，それ以外の出土は見られない．内部の土層は大きく３つに分層可能であるが，いずれも明黒褐色のきめの細かい土層で，石器群の包含層と酷似する．また，全体に第Ⅷ層と考えられる黄褐色粘質土のブロック（径１㎝以下）を含んでおり，第Ｖａ層・第Ｖｂ層堆積時に掘削・埋没したと考えられる．



第20図　龍王遺跡５区 SK-1（1/50）

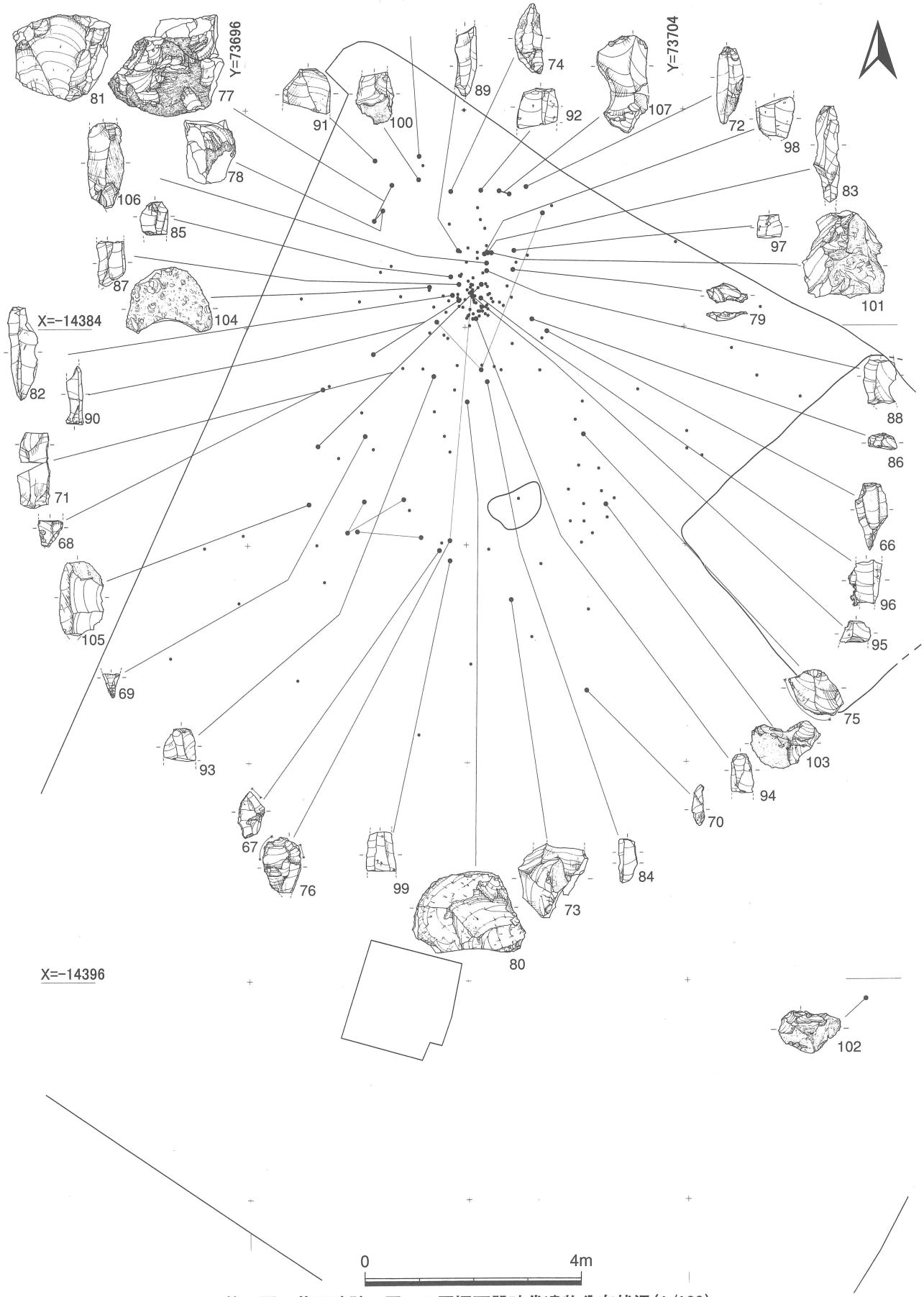
⑶　遺物（第19図，図版７～８）

―分布状況―

５区・６区では古墳初頭の住居跡やピット群が検出されているが，旧石器時代遺物の検出された部分では後世の遺構が検出されておらず，良好な残存状況を示していると考えられる．ほとんど傾斜せず，平坦な地形である．北側と南側は第Ⅷ層までに及ぶ後世の水田造成時の掘削によりその状況は不明であるが，第19図に示すととおり石器群の最も集中する部分と，その周りにまばらな検出状況が見られる．垂直分布もほぼ標高20ｍ付近に集中し，AT上位の一時期の石器群と考えられる．

総数197点をドットで取上げており，廃土の選別などは行っていない．石材は青灰色黒曜石を主体として黒色黒曜石の利用も見られる．いずれの黒曜石も礫面を除去した際の剥片なども検出されており，原石に近い形で石材が搬入されている様子も見られる．他に，安山岩質のチップも若干見られることから安山岩製石器の出土も想定されたが，検出までには至らなかった．また，青灰色黒曜石や黒色黒曜石についてはそれぞれ数種類に分類（肉眼観察）可能だが，種類によっては石核のみの出土や，石核の検出は見られず縦長剥片ばかりの出土など，当地でのみ一連の石器製作を行っていた，とは考えにくい．当然，石器群の全てを検出しているわけではなく，調査区以外に同様の石器集中地点が存在したものと考えられる．ただし，前述したように当地区の周囲は古代以降の水田造成時にかなり掘削が進んでおり，今後近隣において石器群の検出は困難と想定される．

検出された石器群は主に縦長剥片剥離技術を主体とするもので，検出された主な石器は，ナイフ形石器７点，縦長剥片剥離を行う石核１点，縦長剥片及び使用痕のある剥片である．最もドットマップの集中する部分においては，砕片やチップ類がほとんどで，石器製作の一連の行動の中では，廃棄場的な色合いが濃い地区と考えられる．



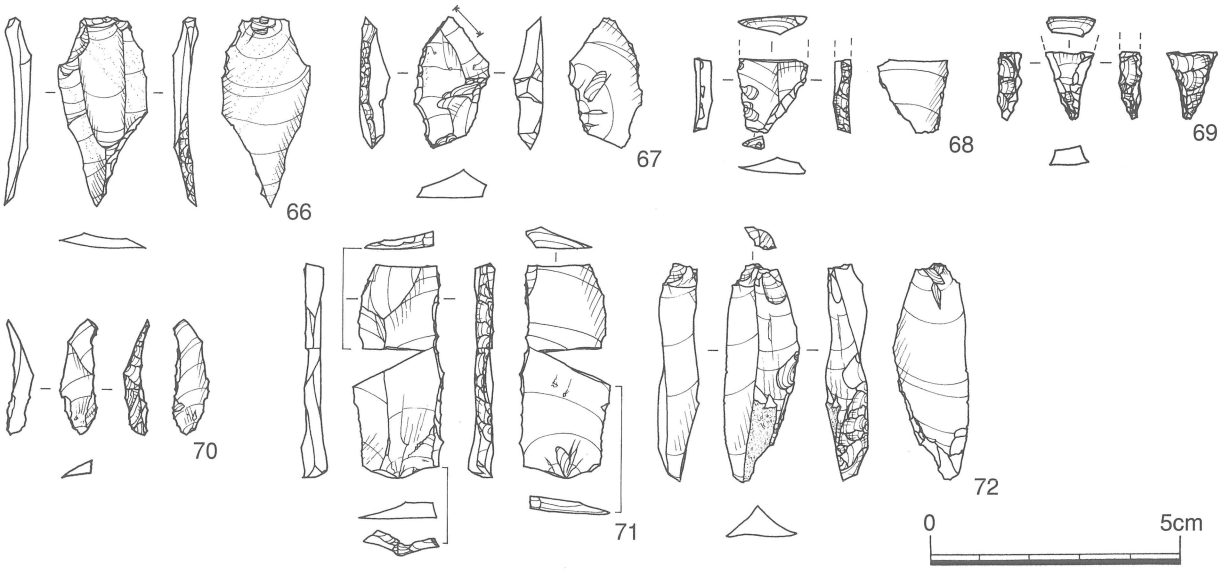
第21図　龍王遺跡５区・６区旧石器時代遺物分布状況(1/100)

第21図に主な石器の出土位置と器種別の分布状況を示す．前述のとおり最も石器の密度の高い部分はそのほとんどがチップなどの砕片類である．その周囲にまばらに石器群が取り囲むような分布状況を示す．ナイフ形石器は打面残置のものが３点検出されており石器群の特徴と言えるであろう．また，ナイフ形石器の半数は欠損品であり，トゥールの使用の場というよりもやはり廃棄場と考えるのが妥当であろうか．最も密度の高い部分以外でもチップや砕片類は検出されており，遺物分布の濃淡が器種や石材の分布に影響を及ぼしているわけでもない．龍王遺跡５区・６区周辺に石器の製作にかかる場や使用にかかる場があると想定され，当地区への不要物の投棄の可能性も考えられようか．

出土石器は縦長剥片剥離を主体とした石器群で，基部裏面加工のナイフ形石器や打面残置のナイフ形石器など，古い要素も見られ，AT 降灰後の石器群でもより AT 降灰期に近いものと考えられる．

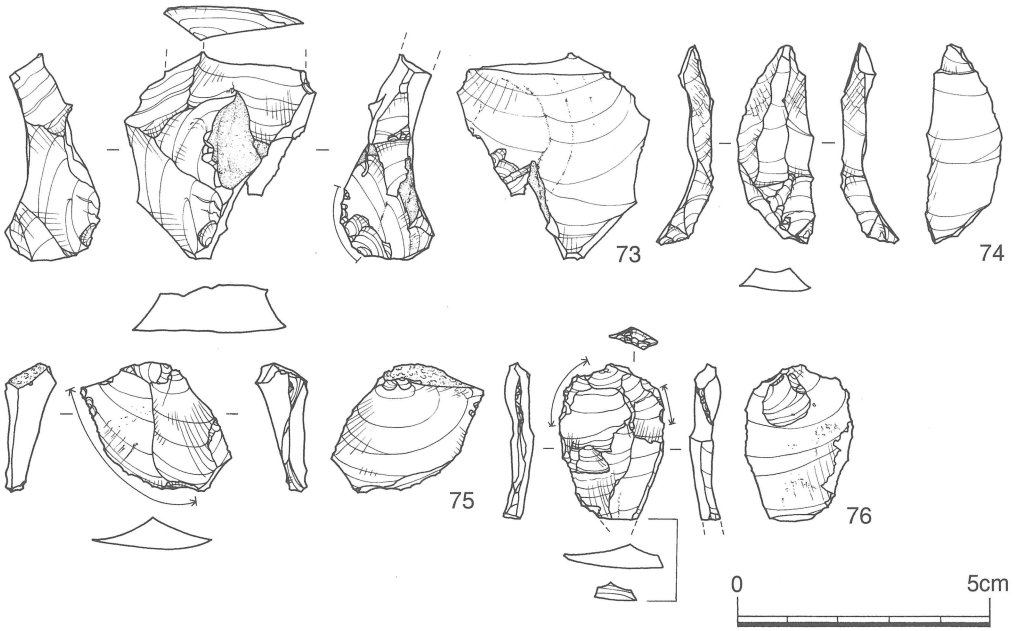
ー出土石器ー

ナイフ形石器：66～70は黒色黒曜石製，**71・72**は青灰色黒曜石製である．基本的には縦長剥片を素材とする１側縁加工であるが一部は２側縁加工ナイフである．**66**は打点部分を残し，右側縁下半に丁寧なブランティングが施される．背面の剥離痕からは連続する縦長剥片剥離技術が見て取れ，後述する黒色黒曜石製石核と同一の石材である．**67**は幅広の剥片を素材とするナイフ形石器とした．右側縁には打点部分を残し，左側縁は素材剥片のエッジ部分であるが，それを取り除くように細かい調整が施されている．また，右側縁上半の刃部には使用痕と考えられる痕跡が見られる．素材はナイフ形石器製作を目的とした剥片ではないであろう．**68**は基部のみの資料で，右側縁に細かいブランティングが施される．**69**も基部のみの資料である．左側縁は主要剥離面側から，右側縁は背面側から細かいブランティングが施され，その後主要剥離面側には左側縁から平坦剥離が施されている．素材は縦長剥片か．**70**はナイフ形石器の調整剥片か，丁寧なブランティング加工の痕が見られる．**71**は２点の接合資料で，下端に打面を残し，右側縁全体に主要剥離面側から細かい調整が見られる．先端部と中央部が欠損するが中央部の不自然な欠損から折断の可能性もあろう．背面の剥離痕から連続する縦長剥片剥離技術が見て取れる．打面は作業面方向からの打面調整が施されている．**72**は打点部分の残るやや厚手の縦長剥片を素材としたもので，右側縁下半に主要剥離面側からのブランティングが施され，最終的には下端に背面側からの調整も見られる．背面には一部礫面も残っており，打面調整は作業面側から施されている．



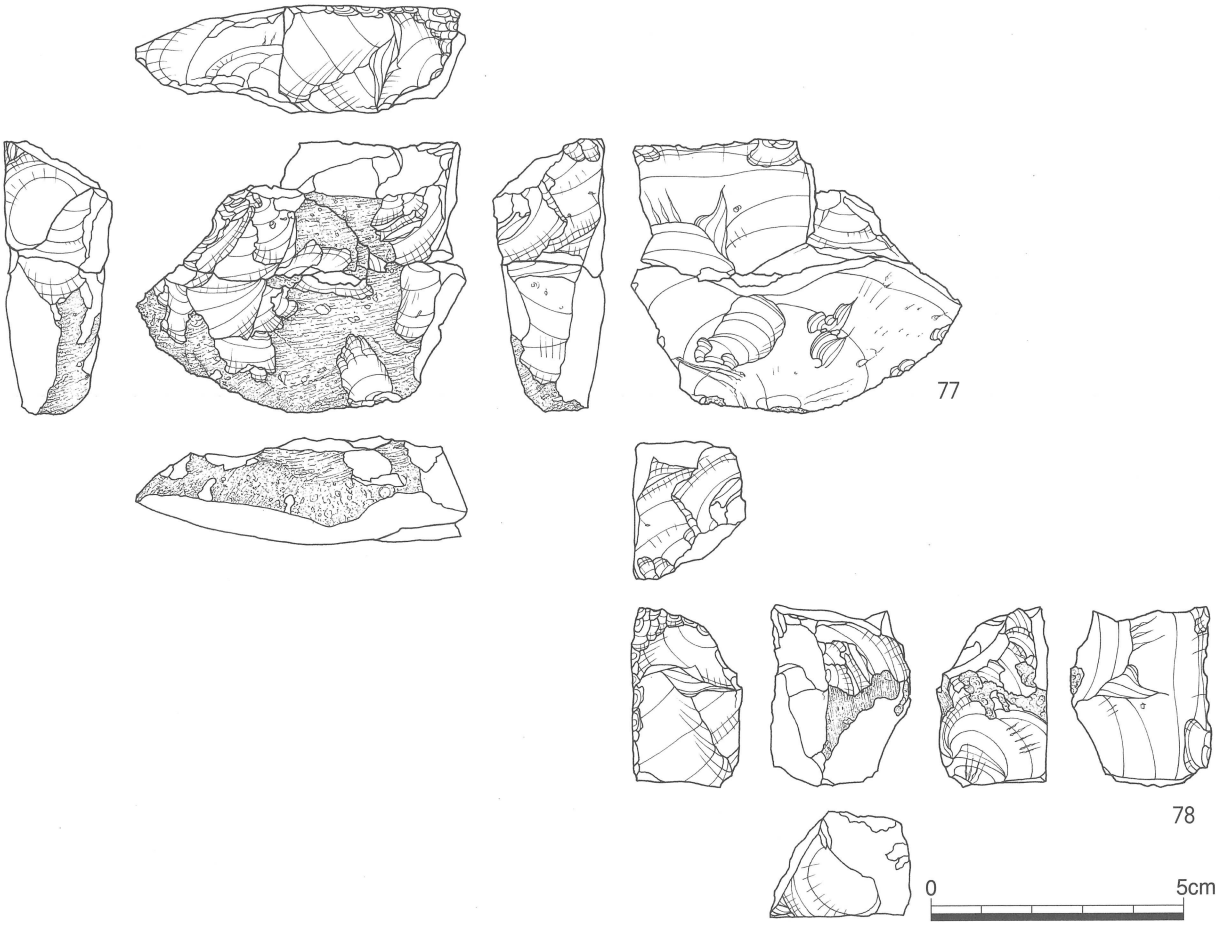
第22図　龍王遺跡５区・６区出土石器（ナイフ）(2/3)

使用痕のある剥片：第23図は，剥片の一部に使用によると考えられる微細な剥離が見られる資料である．いずれも石核調整等の剥片を転用したものと考えられる．**74**は青灰色黒曜石，それ以外は黒色黒曜石製である．



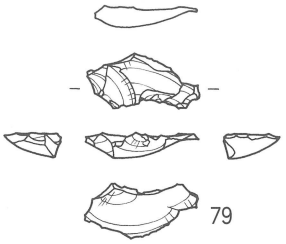
第23図　龍王遺跡５区・６区出土石器（使用痕のある剥片）（2/3）

加工痕のある石器・接合資料：**77**は３点接合の剥片である．石材は**66**のナイフや**81**の石核と同様で同一母岩と考えられる．背面は礫面で原石からの石核作成のための調整剥片である．主要剥離面側には多数の打撃痕が残っており，再分割した剥片（78）を削器として利用している．**78**は分厚い剥片の左側縁上半のエッジ部分に加工を施したものである．特に左側縁上端部は接する３面の剥離面全てに微細な調整が施されており，角の部分を意識的に加工しようとした意図が見受けられる．



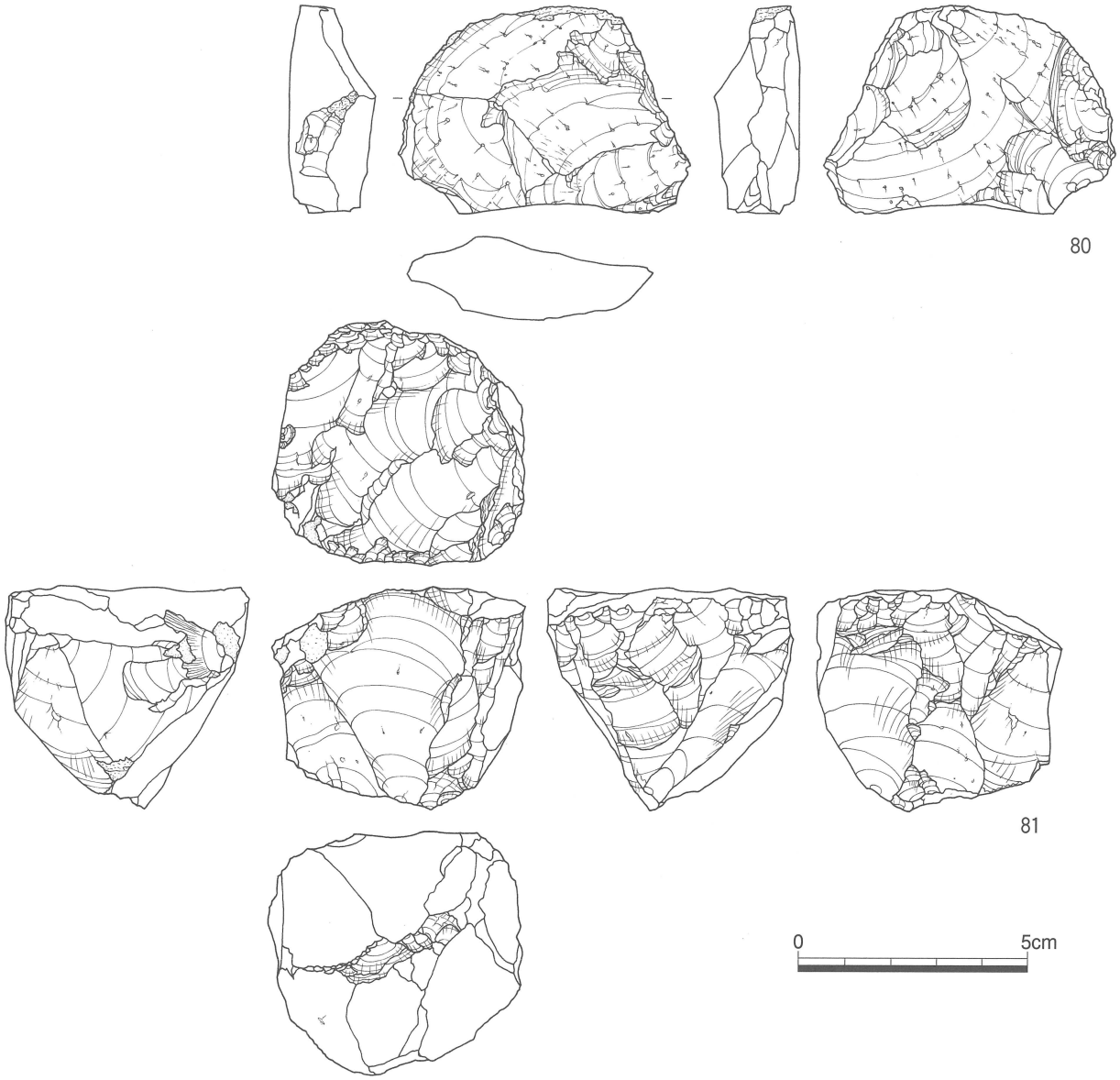
第24図　龍王遺跡５区・６区出土石器（加工痕のある石器・接合資料）（2/3）

打面再生剥片：79は青灰色黒曜石製で連続する縦長剥片剥離を行う石核から剥離されたものと考えられる．作業面側から剥離されており，先行する打面調整剥離も同様である．また，先行する打面調整剥離痕には打点部分が無く，調整後縦長剥片剥離を行い，その後さらに打面の調整を行ったことが伺える．後述の青灰色黒曜石製の縦長剥片からも作業面側からの打面調整の痕跡が見られ，石核の検出はできなかったが，青灰色黒曜石製の縦長剥片剥離を行う石核の存在が予想される．



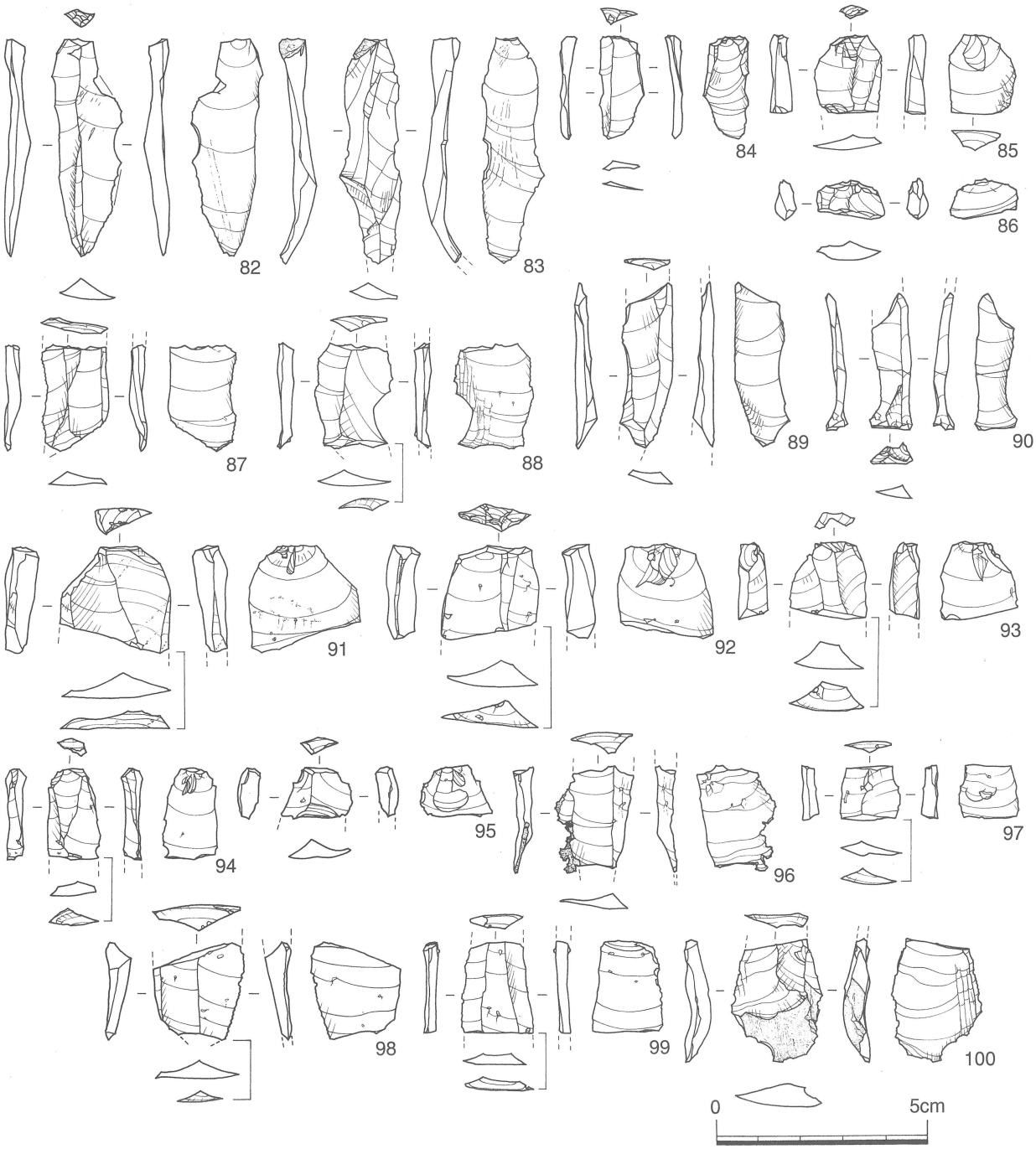
第25図　龍王遺跡５区・６区出土石器（打面再生剥片）（2/3）

石核：80は青灰色黒曜石製の石核とした．不定方向からの幅広の剥片を剥離したものと考えられる．この石核から剥離されたであろう幅広の剥片は検出できなかった．81は黒色黒曜石製の石核で66・77と同一のものと考えられる．正面形状は台形を呈すが，側面形状はほぼ正三角形を呈す．上面形状はほぼ円形をなし，左側縁を除いて円周には細かい打面調整痕が見られる．ただし側面の剥離面からも判るように，最終的には下端から正面・裏面に見られる縦長状の剥片剥離を行っている．右側縁に見られる上面からの縦長剥片剥離の痕跡が，当初の石核の剥片剥離を示すものと考えられる．



第26図　龍王遺跡５区・６区出土石器（石核）（2/3）

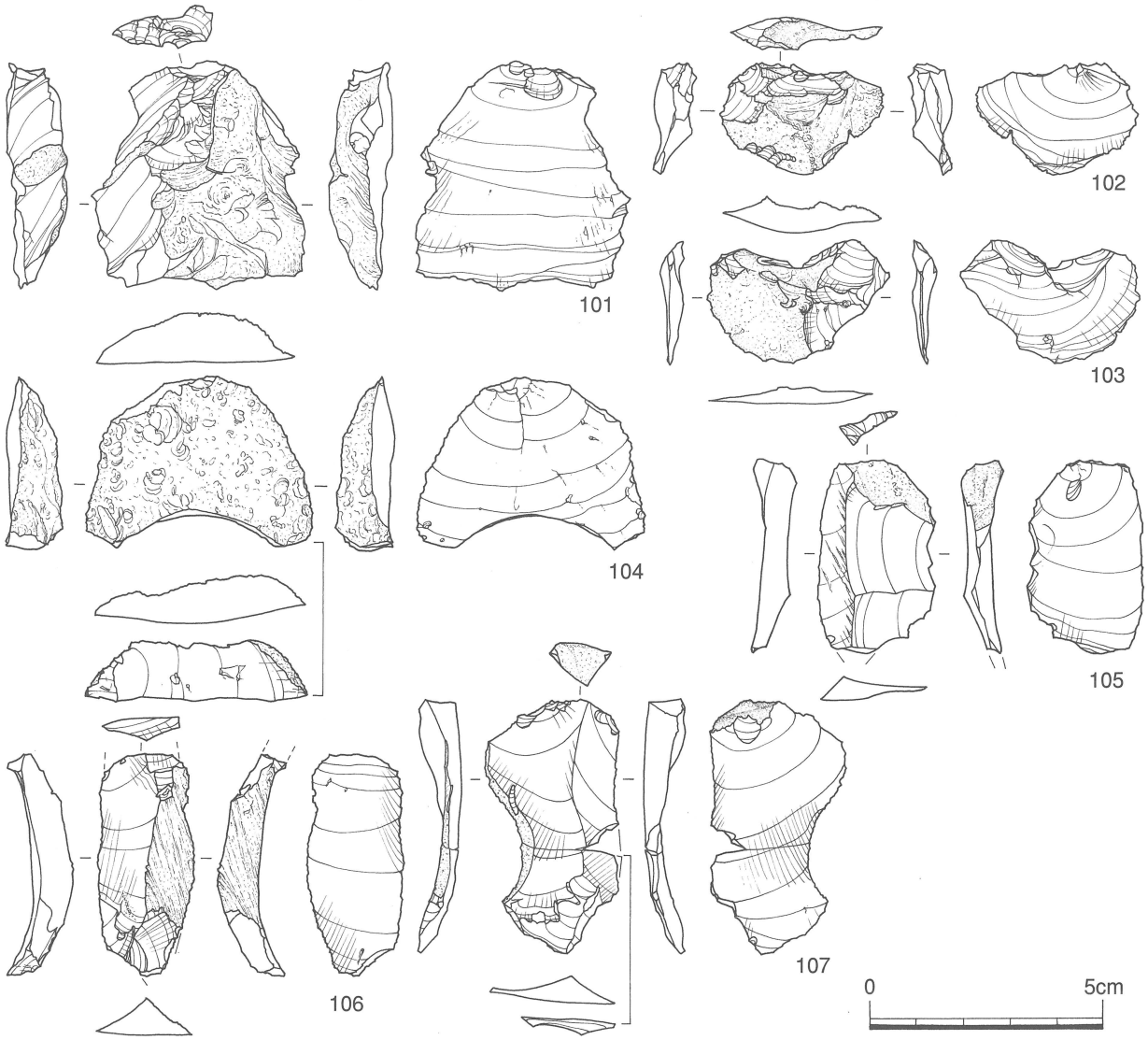
縦長剥片：第27図は縦長剥片とした．**91**が黒色黒曜石製で，それ以外は全て青灰色黒曜石製である．また，青灰色黒曜石も２種類に分類可能で，**82**～**90**までが剥離面表面が滑らかなもので，第22図**71**・**72**のナイフや，第25図**79**の打面調整剥片も同様の石材である．**92**以降は表面にざらつきがあるもので，第26図**80**の石核としたものも同様である．打面部分が残っている資料は概ね作業面側からの打面調整が施されており，剥片剥離の際には丁寧な打面調整を行っている．**90**では下端に先行する打面調整が残されており，打面を上下に入れ替えて縦長剥片剥離を行っている様子が伺える．このことは**93**や**97**の背面に見られる剥離痕からも見て取れる．また，**91**の黒色黒曜石でもみられ，前述した第26図**81**の黒色黒曜石製の石核に見られるような打面の入れ替えが，石材の種類を問わず頻繁に行われていたことが考えられる．したがって黒色黒曜石・２種類の青灰色黒曜石のいずれの石材でも縦長剥片剥離を行っていたことが想定される．



第27図　龍王遺跡５区・６区出土石器（縦長剥片）（2/3）

剥片：第28図は背面に礫面を残す剥片で，原石の礫面を除去する際のものと考えられる．もしくは，**105**・**107**などは石核調整時のものと考えられる．**101**・**105**が表面の滑らかな青灰色黒曜石で，**104**が表面のざらつく青灰色黒曜石である．それ以外は黒色黒曜石である．ただし第26図**81**の石核などとは石材が異なるものである．

小結：龍王遺跡５区・６区ではナイフ形石器以外目立ったトゥールは検出できなかった．しかしながら，剥片剥離の工程を検証可能な石核の検出や，素材となるであろう縦長剥片の検出など一定の成果も見出せる．幾つか判明した事柄を述べる．石材は黒色・青灰色黒曜石を主体とする．黒曜石はいずれも数種類に分類出来そうであるが，いずれの石材も原石の搬入を示す剥片が検出されている．いずれの石材でも縦長剥片剥離を行い，打面を上下に入れ替えている．注目すべきものは，黒色黒曜石製の第22図**66**のナイフ形石器・第24図**77**の剥片・第26図**81**の石核は，同一の石材からの剥離と考えられ，それぞれの接合関係は見出せていないが，かなりの大きさの原石搬入が想定される．また，この黒曜石についてはそれ以外に砕片が検出されていない為，当地のみで一貫した石器製作を行っていない．このことは青灰色黒曜石でも，ナイフ形石器と素材剥片であろう縦長剥片は検出されるが，石核の検出は見られないなど，今章当初で述べたように当地以外の周辺部に同様な石器集中地点が存在することが想定されよう．

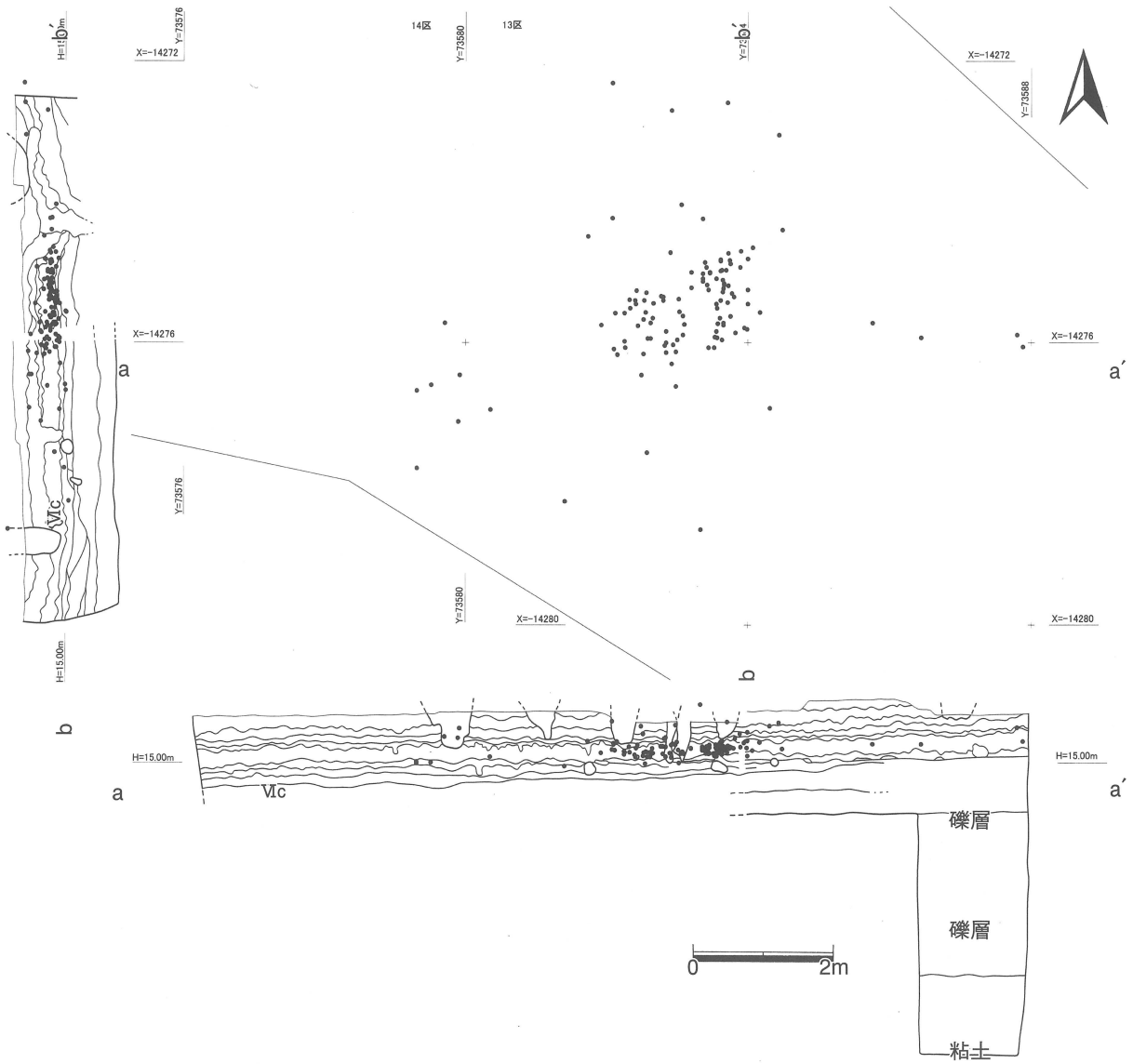


第28図　龍王遺跡５区・６区出土石器（剥片）（2/3）

第４節　龍王遺跡13区・14区石器群

(1)　土層堆積状況（第29図，図版３）

龍王遺跡13区・14区は地表面から約1.5m下層で石器群が検出される．今報告中でも最も深い地点からの検出である．13区・14区南西側は弥生時代の河川跡が蛇行して流れており，他の旧石器時代遺物の検出された丘陵の上部ではなく，丘陵の縁（へり）からさらにやや下った河川に近い地点と考えられる．そのことは土層堆積からも明らかで，他の地点で見られるような第Ⅷ層は検出されず１ｍを越す礫層が検出され，さらに下層は50cm以上の厚さを持つ粘土層である．明らかに河川の影響を受けつつ堆積したものと考えられる．石器検出層は礫層から30cmほど上層で，土壌化が進んだ暗褐色土層中であり，その直下層にAT火山灰が検出されている．通常，島原半島地域ではAT火山灰は科学分析によって抽出しなければ見出せないが，当地区では肉眼観察可能な径５cmほどのブロック状の火山灰が数箇所残存しており，石器の時期決定に大きく寄与している．石器検出土層の上層にはさらに厚く縄文早期や古墳時代の包含層が堆積し，また，最上部では古墳時代の住居群が検出されている．土層図に見られる上面からの掘り込みは古墳時代住居跡柱穴である．13区・14区は当初古墳時代の調査の終了を持って工事が開始される予定であったが，年末の調査最終日に柱穴最下部から第33図112のスクレイパーが検出されたため期間を延長して調査を行っている．



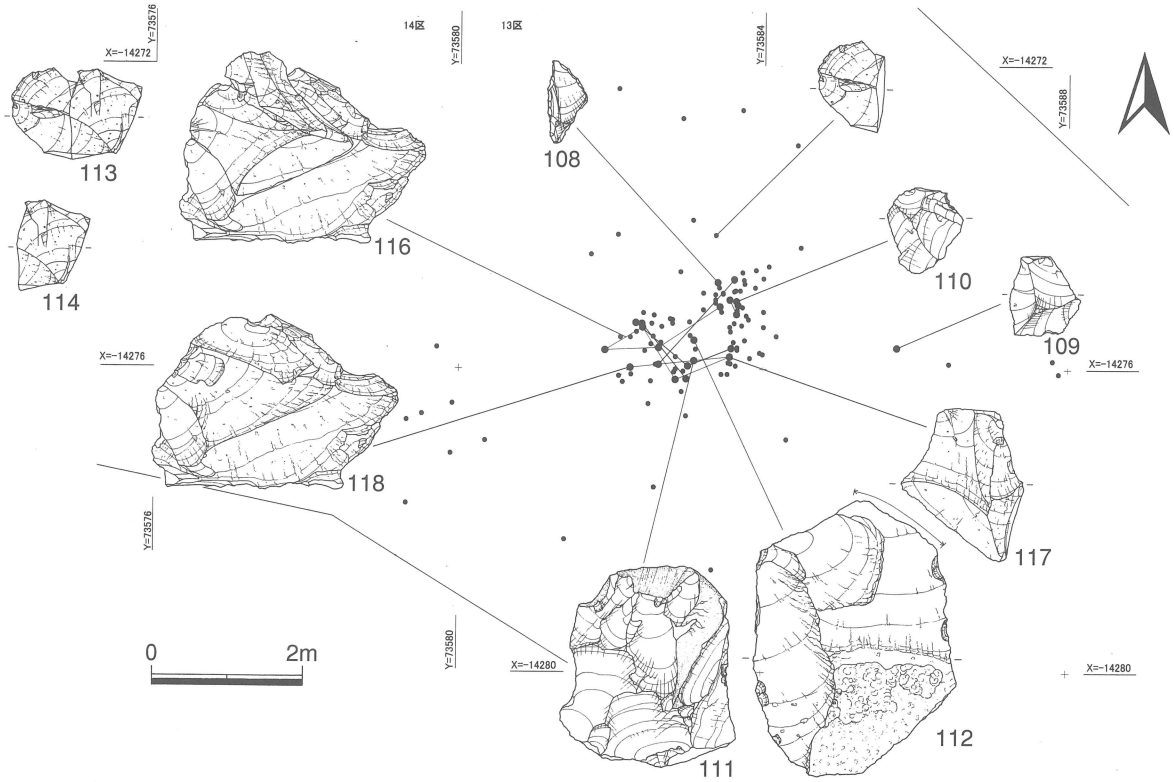
第29図　龍王遺跡13区・14区旧石器時代遺物検出状況(1/100)

(2) **遺物**（第29図・第30図，図版３～４，８～９）

ー分布状況ー

第29図・第30図のとおり非常に遺物が集中して検出されている．水平分布もほぼ揃っており，全て一時期の遺物と見て問題ないであろう．第Ⅵｃ層が主な包含層であり，その上下でも若干遺物が検出される．第Ⅵｃ層下部にAT火山灰のブロックが目視され，分析結果との整合性も間違いないところである．AT降灰後の石器群である．

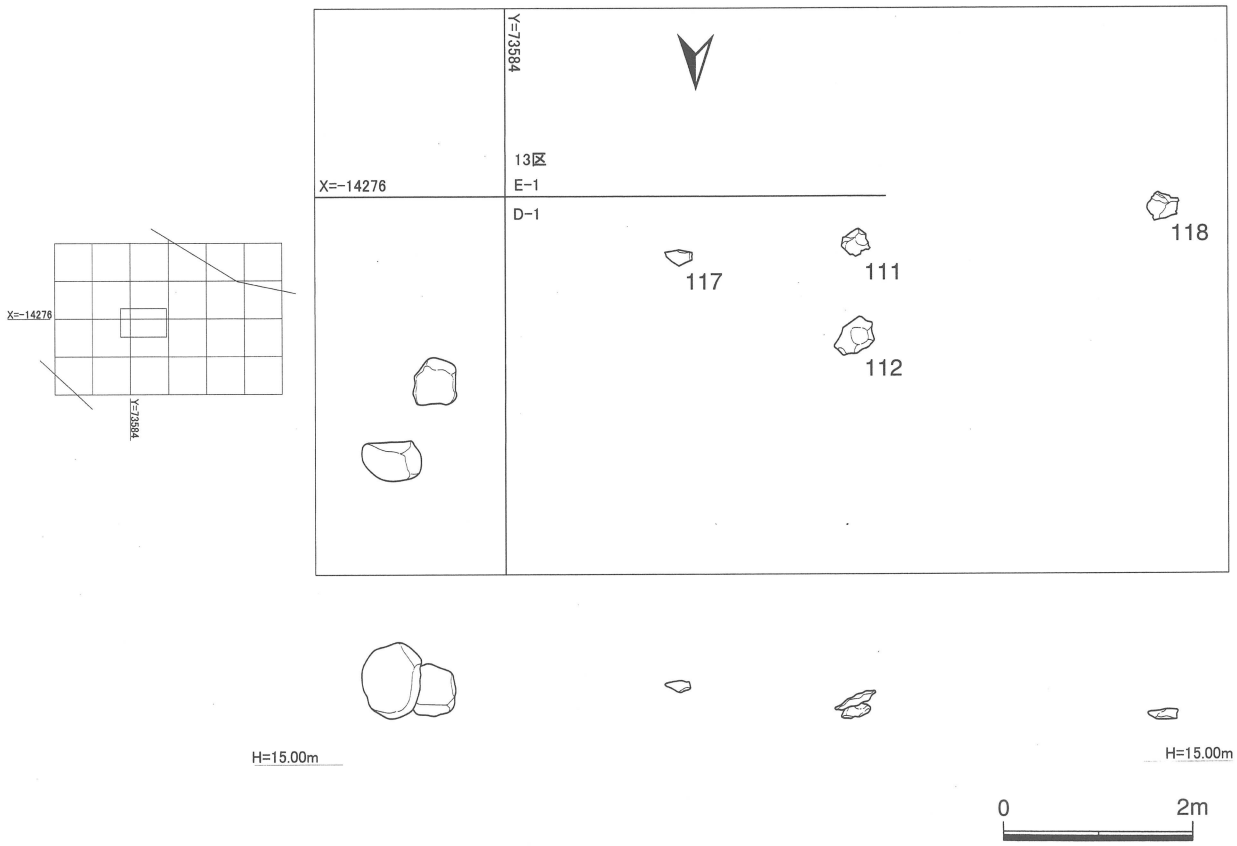
総数130点をドットで取上げており，廃土の選別などは行っていない．出土石器の９割強は斑晶のやや粗い安山岩で，そのほとんどは剥片剥離の際の砕片と考えられる．この安山岩はその母岩であろうと考えられる拳大の石核（118）が検出されており，数点の接合資料が確認されている．今後作業が進めばさらにその数は増えると考えられる．その他に黒色黒曜石製のナイフ形石器．及びその素材と考えられる剥片．佐世保市福井洞穴周辺産出と考えられる黒色の無斑晶質安山岩（北松浦玄武岩）．



第30図　龍王遺跡13区・14区旧石器時代遺物分布状況(1/100)

大型の凝灰岩系石材の打面再生剥片．堆積岩系の大型スクレイパーなどが含まれる．当地区で特徴的な事柄は，９割を超える出土量の安山岩以外の石器は剥片剥離の際の砕片等がほとんど無く，当地での剥片剥離は行われていない．特に大型の打面再生剥片や大型スクレイパーなどはそれ以外１点も検出されていない．また，本県地域の旧石器時代遺物ではほとんど見かけない石材であり，印象的には肥後系の石材か．また，出土石器の９割を越す安山岩についても今報告で同様の石材は見かけられない．佐賀県地方の安山岩とも印象が異なる．13区・14区では黒色黒曜石製のナイフ形石器と，堆積岩系の大型のスクレイパーの２点がトゥールと呼べるものであるが，いずれも長期間の使用によるものか刃部などにかなりの摩滅が見られる．石器の検出地点・石材・出土石器の内容など，今概報の他地区の状況とは明らかに異なる状況が見られる．このことをもって，他地域からの人間の直接的な流入を示すとは断言できないが，他地区の石器群を営んでいた人間とは明らかに行動パターンが異なるということは言及できるであろう．

第30図に主な石器の分布を示す．いずれも最も集中する部分にあたる．第Ⅵｃ層前後の土層は硬く

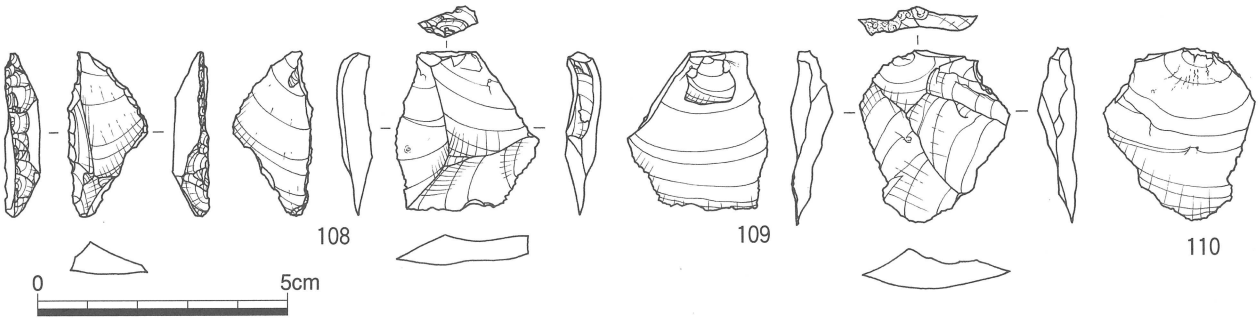


第31図　龍王遺跡13区・14区大型剥片石器検出状況(1/20)

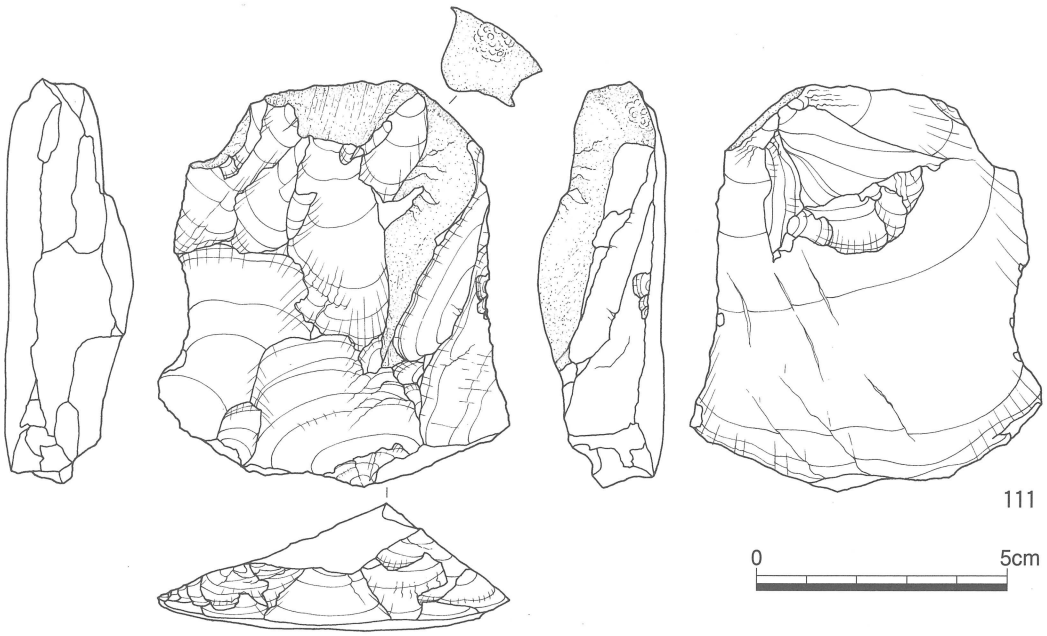
掘削はやや困難であった．さらに狭い範囲に微細な安山岩砕片が集中して検出され，ますます調査を困難にさせた．また，第31図に大型剥片石器と礫の平面分布と垂直分布を図示する．２点の礫には加工痕や被熱痕などは見られなかったが，図で見るとおり「立った」状態で検出されている．これに対して，大型の剥片石器はいわゆる「寝た」状態で検出されている．礫は人為的に立てられ，剥片石器は放置・廃棄されたかのような状況も考えられよう．かなり原位置に近いものと想定されるが，その他大勢の砕片類は上下にレベル差があり，慎重な検討が必要であろう．

ー出土石器ー

ナイフ形石器：108は黒色黒曜石製のナイフ形石器である．形態的には狸谷型ナイフ形石器である．厚みのある剥片を素材とし，左側縁は主要剥離面側から丁寧なブランティング加工により直線状に仕上げられている．これに対し右側縁は主要剥離面側からのブランティング加工により，下半部分をゆるく弧を描くように仕上げられている．右側縁上半部の刃部は，素材剥片のエッジ部分をそのままとしているが，主要剥離面側からの掻器状の細かい使用痕が認められ，微細な剥離が見られる．かなり長期間の使用によるものか．**109・110**は黒色黒曜石製で，ナイフ形石器の素材剥片か．石材は光沢のない黒色黒曜石で**108**とは異なるものの，**108**～**110**の背面の剥離状況から，打面を頻繁に入れ替えて寸詰まり状の剥片剥離を行う石核が想定される．



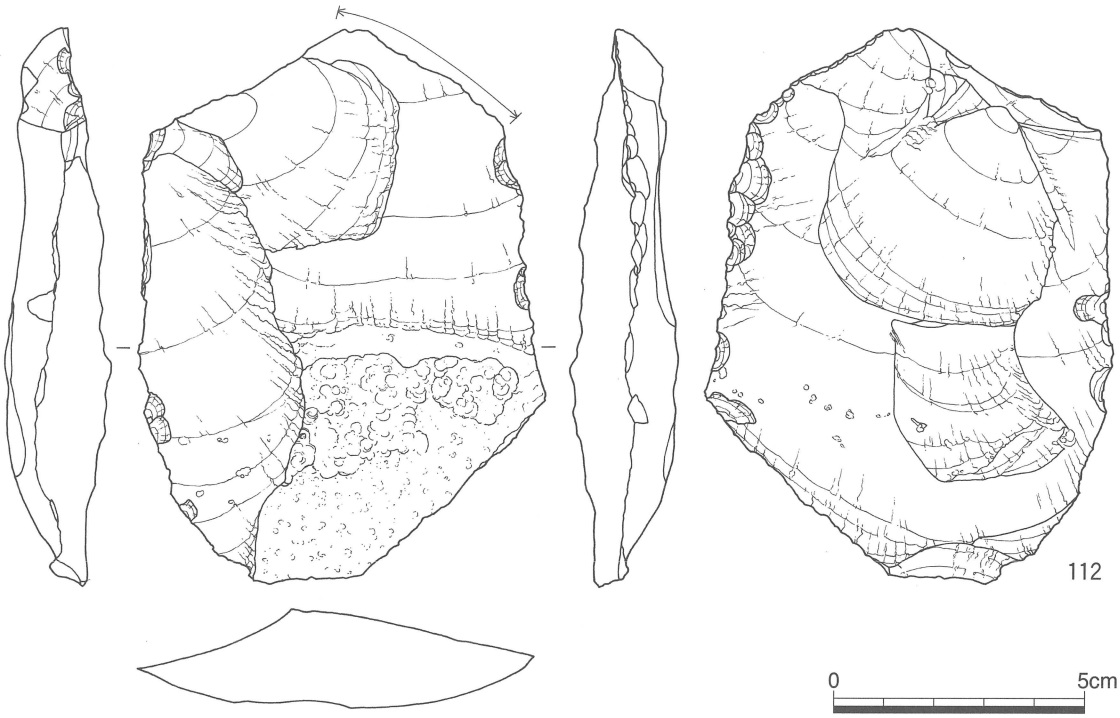
第32図　龍王遺跡13区・14区出土石器（ナイフ他）(2/3)



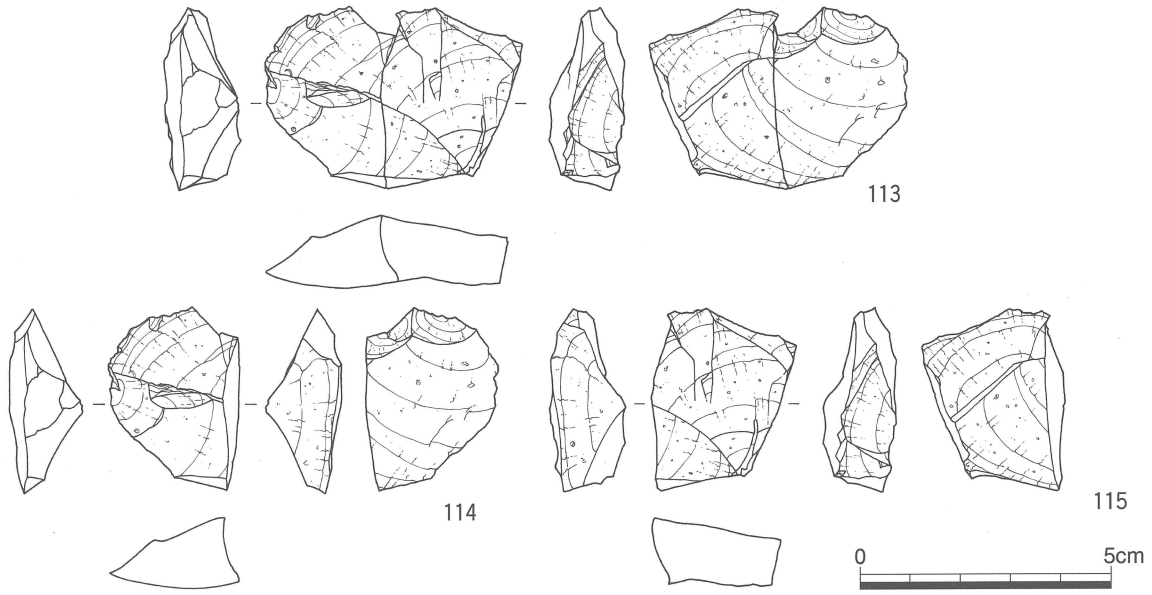
第33図　龍王遺跡13区・14区出土石器（打面再生剥片）（2/3）

打面再生剥片：111は打面再生剥片で，かなり大きな石核から剥離されたものである．作業面側には３箇所の剥片剥離の痕跡が見られ，連続する縦長剥片剥離を行っていた石核から剥離されたものであろう．打面調整は作業面側からやや大きめな剥離で行われている．礫面がかなり残っており，剥片剥離当初頃の打面再生と考えられる．再生は作業面の反対方向から行われており，礫面打面である．打点部分には数度の加撃痕跡が残る．正面上端に見られる逆台形の部分は節理面で，右側縁に見られる部分が礫面である．素材は縞模様が見られ，礫面部分は円礫状である．同石材のチップや砕片はまったく確認されないことから，近隣に剥片剥離を行っていた地点が存在するかも知れないが，剥片の周囲に細かい使用痕らしきものもみられ，スクレイパーなどとして携行していた可能性もあろう．

スクレイパー：112は剥片素材の大型のスクレイパーである．縞模様の入る堆積岩系の石材で，周縁に細かい調整痕（使用痕？）が見られる．また，背面右側縁上方には若干の摩滅したような痕跡も



第34図　龍王遺跡13区・14区出土石器（スクレイパー）（2/3）



第35図　龍王遺跡13区・14区出土石器（剥片・接合資料）（2/3）

見られる．打面は単剥離面打面で，剥片剥離時の加撃が大きかったのか，かなり発達したバルブが見られる．また，下端も蝶番剥離により歪んでいる．背面左側には先行する剥離面があり，その大きさや角度から本資料と同様の剥片を剥離したものと考えられる．剥片自体の大きさや，背面の先行する剥離面から，相当な大きさの原石が想定される．**111**と同様にチップや砕片がまったく検出されていない．また，石器周辺の使用による摩滅がかなり進んでおり，石材の硬度も関係するであろうが，かなり使い込まれた石器のように見える．**108**のナイフ形石器も長期間の使用が考えられ，111や112のようにかなり長い間使用され，携行されていた石器とも考えられる．当地区周辺ではかなり広範囲で古墳時代の住居跡や溝などを発掘したが，**111**・**112**と同様の石材は検出されていない．従って周囲に同時期の関連する石器集中部分の存在は低いと考えられ，非常に短期的・局所的な滞在の痕跡と想定され，今報告中ではかなり特異な検出例と考えられる．

剥片（第35図）：**113**は２点の接合資料である．右側縁にも折断されたような痕跡が見られ，剥離当初はかなり幅広の剥片と考えられる．**114**・**115**は**113**の２点の接合資料の個別図である．**114**の上端は素材剥片の打点部分であるが，折断後背面側からの２度の剥離で打面部分を除去している．**115**には折断後の加工は見られない．石材は佐世保市福井洞穴周辺で採取可能な黒色の無斑晶質安山岩（北松浦玄武岩）で，チップや砕片等が見つからないことから，**114**・**115**の状態となってこの地に搬入されたものであろう．**115**は縄文時代早期の包含層からの出土であるが，第Ⅵｃ層出土の**114**との接合関係から，旧石器時代に属するものである．

剥片（第36図）：**116**は７点の接合資料である．石材は斑晶のやや粗い安山岩で，背面側に見える部分は節理面と考えられる．右側縁に主要剥離面側からのやや大ぶりな剥離を施しその剥離面を打面として，右側縁から剥片剥離を繰り返している．接合する剥片のほとんどは，剥片剥離時の加撃により弾けた小剥片などであるが，**117**は比較的大きな剥片で，素材剥片と考えられる．また，主要剥離面側右上方からの剥離痕も比較的大きな剥片を剥離しており，幅広の剥片を素材として石器の存在が予想される．ただし，同石材のトゥールは検出されておらず，また，石器の加工を行ったような砕片も検出されておらず，当地では素材剥片の獲得までの作業を行ったものと考えられる．